

# インターカルチャー

## INTERCULTURE

NO. 100

2005年6月号

JUNE



■■ 学校法人 千里国際学園 Senri International School Foundation (SISF) ■■

千里国際学園中等部・高等部 Senri International School (SIS) 併設 大阪インターナショナルスクール Osaka International School (OIS)

〒562-0032 箕面市小野原西4丁目4番16号 TEL 072-727-5050 FAX 072-727-5055 URL <http://www.senri.ed.jp>

# 100号 記念

特集「ふたつの学校がここにあること」

特別寄稿「学期完結男」

学園祭報告

論文・ディベートで優勝

卒業生教育実習で奮闘

囲碁大阪府大会準優勝



2005/5/28 学園祭のステージは玄関！

# 100号に寄せて Two Schools Together

大迫弘和

SIS校長

『学園設立の目的』を読んでいただこうと思います。勿論それは日英両語で書かれています。

『学園設立の目的』

The Foundation Purpose

千里国際学園は、関西在住の帰国生徒・一般生徒・外国人生徒のために、日本や海外の最高の教育システムや教育技術を、校舎・教育活動・カリキュラム・理念・経験・夢を共有している二つの学校に採り入れ、実践するために設立された。

The Senri International Schools were founded to bring together, for the benefit of returnee, national, and international residents of the Kansai region, the best of Japanese and non-Japanese educational ideas, systems, and techniques into two schools which share a building, programs, curricula, philosophies, experiences, and dreams.

更に『建学の理念』を書きます。6項目あります。

二つの学校は一体である。

1 私たちは二つの学校が常に一つになろうと努力することが、生徒たちにとって大きな利益になると信じる。

2 私たちは二つの学校の緊密な関係が、私たちの他の全ての理念を成功させるために非常に重要であると信ずる。

Two Schools Together

1 We believe that it is important for the two schools to continually explore ways to come together, because this brings great benefit to our students.

2 We believe that the closeness of the schools is so important that it is the central part of our vision.

考え方の交流

1 私たちはこの学園が、教員や保護者、生徒たちの間で自由に教育上のことやその他知的な考え方の交流が行われる場所であるべきだと信ずる。

2 私たちは教員や保護者、生徒たちの多様な経験を尊重し、自由な考え方の交流がこの姿勢をよりよいものにしていくだろうことを信ずる。

Exchange of Ideas

1 We believe that our schools should be a place where ideas, particularly educational

ideas, are freely exchanged among faculty, parents, and students.

2 We believe the diversity of experiences of our faculty, parents, and students should be celebrated and the free exchange of ideas will enhance this celebration.

文化の理解

1 私たちはこの学園はホスト国である日本の文化の学習・鑑賞・理解に深くかかわるべきであると信ずる。

2 私たちはこの学園は日本と近隣のアジア諸国の文化及びその他の世界各国の文化とも関係していくべきであると信じる。

3 私たちは私たちのコミュニティが多様な文化によって成り立っていることから、この学園では異文化間の理解が規範とされ、研究され、尊重される場であるべきであると信ずる。

Understanding of Cultures

1 We believe that our schools should be deeply involved in the culture of our host country in study, appreciation, and understanding.

2 We believe that our schools should be involved with the relationship between the culture of Japan and the surrounding cultures of Asia and the rest of the world.

3 We believe that since our community is composed of so many cultures, our schools should be a place where intercultural understanding is modeled, studied, and celebrated.

学園での学習

1 私たちは、この学園の特別な性格が、生徒たちが調和的かつ個性的で責任感を伴った考え・行動を取れる人になるように力づけるべきであり、その目的を達成するために、学園の教育内容は変化に富んだ、豊かで、そして革新的な内容を持ったものであるべきと信ずる。

2 私たちはこの学園の主要な責任の一つは、生徒たちが成人した後も学ぶことを続けられるように、学ぶ方法を習得させるように努めることであると信ずる。

Learning

1 We believe that the special nature of our schools should encourage students to be well-rounded, individualistic, responsible thinkers and doers, and this is why we believe our programs should be full of choices,

special programs, and innovative structures.

2 We believe that one of the key responsibilities of our schools is to encourage students to learn how to learn and to carry this kind of learning into adulthood.

共通の基盤

1 私たちはこの学園の二つの学校が日本と外国のものの考え方・習慣・生活信条・伝統の共通の基盤を示すべきであると信じる。

Common Ground

1 We believe that our schools should represent a common ground between Japanese and non-Japanese ideas, practices, beliefs, and traditions.

規範

1 私たちはこの学園の二つの学校はお互いにとっての規範として存在すべきであると信ずる。

2 私たちはこの学園の目標の一つは日本国内や海外の学校に教育の新しい考え方や実践、技術やシステムを示すことであると信ずる。

Model

1 We believe that our schools should exist as a model for others.

2 We believe that one of our goals is to demonstrate new ideas, practices, techniques, and system to other schools around Japan and the world.

学園15度目の春を迎え、また『インターカルチャ』も100号を迎える今日、改めて『学園設立の目的』と『建学の理念』を、じっくりと噛み締めたいと思うのです。

私たちは、このような目的を持った学園に集い、このような理念を実現するために、日々の教育活動に専念している。

そのことに揺れはないか。信じて前に進んでいるか。

まずは生徒一人一人を心から愛すること。

そして私学人として、自らの学園を愛すること。

全てはそこから始まる。

生徒のために、学園のために、自らがどれくらい貢献できているか。常にそのことを問いながら進んで生きたい。

自らの行動を生徒と学園のために選択していかうという意志を、今まで以上に強くしていきたいと思うのです。

## インターカルチャー100号記念特集

## 「ふたつの学校がここにあること」

インターカルチャーは、第100号を迎えました。ひとつの通過点ではありますが、開校15年目ということもあり、区切りの良い数字なので何か特集を組もうと考え、このテーマで、教職員・生徒・卒業生・保護者等の学園関係者すべての方から原稿を募集しました。

### 新たな『ふたつの学校がある学び舎』との出会い

松本明彦

10年生保護者

私は、本年度高等部に入学した生徒の保護者です。私は、1995～98までシドニー日本人学校(SJS)で派遣教員として勤務していました。SJSでは、日本人学校の中でも大変ユニークな教育実践がなされていました。日本人学級が2学級、もう1学級は国際学級といって現地の子供たちが現地の教育制度で学ぶ学級があり、共存しながら学校生活を送っていました。体育、図工、音楽、家庭科などは日豪両方の子どもが共に学び、メインとなる学校行事なども一緒に行っていました。また日本人学級は、通常の教科の他に毎日1時間、現地の教員から英語を学び、国際学級の子供たちは逆に毎日1時間日本語の授業を学んでいました。

このような生きた国際交流の場が学校生活のいたる所にあったSJSを、私は日本の学校教育のモデルとすべき学校であると考え、帰国後、自分の子どもが成長したら、ぜひそのモデルとなるべき教育に近い実践をしている学び舎に入学させたいと強く願っていました。そうした中、ある日、インターネットの検索でとても興味を惹かれる学校に出会うことができました。それがこのSISだったのです。まさに、新たな『ふたつの学校がある学び舎』との出会いでした。まずその情報を妻と共有し、子どもをこの学校へ進学させることについて妻の賛同も得ました。子どもも連れて何度か学校訪問を重ね、本人も自分に一番ふさわしい学校だと感じてくれました。何とか入試もパスし、4月からこのSISに通っています。

1ヶ月たった今では、学校にも寮にもすっかり慣れ、日々の授業も大変興味のわくものばかりだと話しています。中学校の時、授業のことなどほとんど話題になかったわが子がです。まさに親が描

いていたとおりの学校生活を送ってくれているようです。二つの学校が同じ敷地内に共存し、お互いをリスペクトし合いながら生活できることは、学業に勝るとも劣らない財産になると信じています。子どもには、この3年間で自分の進むべき道をしっかりと見つける期間にしてほしいと願っています。『ふたつの学校がある学び舎』で学べる幸せを子どもも保護者も感じながら…。

### 「あの時」の一言

宮地美玲

中等部2年

1年前、私がここSISに入学した当初、「二つの学校がひとつにある」ということがあまり感覚がつかめてませんでした。しかし、7年秋学期から音楽やPE(保健体育)など、OISの生徒と一緒にやる機会ができて、入学当初は実感できなかったことがだんだんわかってきたような気がしました。

私がこの点で良かったな、と思うことはたくさんありますが一番大きいのはやはり「友達の幅が格段に広がった。」ということです。ある日のPEの事、同じチーム内でペアを組む機会がありました。私は知ってる人がほとんどいなくて、ペアを探して困っていたとき同じ学年のOISの子が「一緒にペアを組もうよ!」と声をかけてくれたのです。その子は他にもたくさんOISでの友達もいてたどろろに、ペアを探して困っていた私に自ら声をかけてくれたのです。私はとても嬉しくなり、おもわず「ありがとう!」と言い、それからお互いのことや、スポーツディが近かったのでその話題で盛り上がり、いろいろな話をしていました。しかもその日のPEはチームが大勝利!本当に嬉しかったです。そのときに彼女が声をかけてくれていなかったら、私は今ごろどうなっていたのか、自分でも想像できません。

このとき、私に声をかけてくれた子は、音楽の授業と一緒に今でも仲良くしてくれています。そして8年になってからも、学園祭の店係のミーティングが終わった後一緒に帰っているいろいろな話をしたり、お互いにメールアドレスを交換しあってメールをしたり、本当にあの時、声をかけてくれて良かったです。彼女はそれだけでなく他のいろいろな時も、失敗してしまった私をフォローしてくれたり助けてくれたり、感謝の連続です。まだ知り合って1年もたっていないのに、随分前から彼女のことを知っている気がします。

あの時、彼女がかけてくれた一言。

それが私達の始まりでした。私はあの時の瞬間を大切にこれから彼女と仲良くしたいと思います。

もちろん彼女以外の子でも、OISの人たちがみんな仲良くしてくれたり、一緒にいるんなことに取り組んだり一緒に帰ったりと、二つの学校という枠を飛び越えてたくさんの友達ができたこととても嬉しいです。また、この環境を与えられたことについても感謝したいと思います。

一見似ているように見えて、実はこの二つの学校は異なるところもたくさんあります。だけど、その違いがあるからこそ「二つの学校が一つのところにある」ということが面白くなっていくのではないかと、私は考えます。

これからもこの「二つの学校が一つのところにある」という環境を生かして生活していきたいと思います!

### ふたつの学校がここにあった(・・・)こと

新見眞史

2005年度卒業生

(キャンパス内での友達との会話)

「あれ、新見君6月に大阪帰っちゃうの?」

「いや、友達の卒業式行ってくるだけだ

よ。」

「えっ？卒業式？6月に？」

(Year Book を友達に見せながらの会話)

「これ新見君だよな？生徒会長やってたんだ〜。」

「役職はこの子が副会長、書記、会計、最後にこいつが通訳だよ。」

「えっ？通訳？何それ？」

上記の会話は私の体験から引用したものです。皆さんは「ふたつの学校がここにあること」に関して、どのように感じていますか？入学・編入してまだ日が浅い人は戸惑いを、逆に、それなりの年月を過ごしてきた人は慣れてしまい、特に何も感じていないかもしれませんね。卒業生である私から一つ、在校生の方々へ伝えたいことがあります。それは、このふたつの学校を通して学ぶことはとても貴重な体験であり、間違いなく一生の宝になるであろうということです。後になって後悔しないよう、しっかりとそのことを心に刻み、ふたつの学校生活をEnjoyしましょう！

・・・さて、以上は卒業生達（2005年度に限らない）が卒業後、一度は感じたであろうことを文章化してみたものです。この文章を読んでみてどうです、卒業生の皆さん。共感して頂ける方は多いのではないのでしょうか？

私も在校生の皆さんに対し、「君たちの今の環境は貴重だから、それをきちんと自覚して日々過ごしましょう」そんなアドバイス（お節介？）をしたい気持ちがあることは否定いたしません。然し、私はそこからさらに一步踏み込んだ観点から一言申し上げたいと思います。

「ふたつの学校を意識してはいけないうい」これが私からのアドバイスです。おやっと思われた方もいらっしゃるかもしれませんが、これは先程私が述べたことと矛盾するものではありません。私が意味するところは即ち「特殊な環境にいることは念頭に置きつつ、学校がふたつに分かれているんだという意識は持たない」ということです。

違いを理解し、受け入れることこれが国際化への第一歩であると思えます。千里（もしくは大阪）国際学園と名がついているように、この学校が国際化に重点を置いていることは疑いありません。また、多くの生徒もそれを望んでいることと思えます。では、どうすれば

違いを理解し、受け入れたと認識出来るのでしょうか？よく「人は人、自分は自分」で片付けてしまう人がいますが、それはちょっと乱暴だと言わざるを得ません。

私は、「違いを違いと“認識”はしながらも、“意識”はしなくなったとき」これが国際化の度合いを測る一つの目安になるのではないかと思います。（注：私たちは皆同じという考え方とは全く異なります）異質性を頭では理解しつつも、それが意思疎通を図る上で妨げにならない。限りなく理想に近いかもしれませんが、私はそれこそが「国際化する」という意味なのではないかと思います。

「ふたつの学校を意識してはいけないうい」私が意図することをお分かり頂けたでしょうか？OIS・SISにはそれぞれ違いがあり、それを“認識”することは必要なことです。然し、それらを“意識”することは必ずしも必要なことではなく、寧ろ国際化する為の妨げになるのではないかと私は思います。

長々と述べてきましたが、あくまでもこれは私の一見解に過ぎません。特に今回は、国際化を目指すという観点からアプローチしたものです。ですから、もう片方の学校に対しどのように接してゆけばいいのか、それを考えるときの参考にもして頂ければ幸いです。

繰り返しになりますが、「ふたつの学校」というのが貴重な体験になることは間違いありません。そのことだけは努々忘れないよう、老婆心ながら忠告させていただきます。

## このふたつの学校に思うこと

ヘイガン和子

12年生保護者

大阪インターナショナルスクールが開校すると知って、開校準備中にこの学校を見学したのは、もう14年も前の事。車を降りて学校の周辺をうろついていると、学校からおじさんが出てきて、にこやかに挨拶をして下さいました。子供達が入学してから知ったのですがそのおじさんは、大阪国際文化中学校・高等学校（OIA=SISの旧校名）の初代校長藤沢皖先生でした。

OIA（現SIS）とOISは開校前でしたの

で、梅田にあった学校開校準備事務所にも伺い、当時のOISの校長や教頭からもじっくりお話を聞かせて頂きました。

「日本でも新しい試み、日本の中高校とインターナショナルがひとつのキャンパスで学ぶ」、まるで自分が入学するかのように興奮してお話を聞かせていただいた事を今でも鮮明に記憶しております。

1991年8月30日、OISの開校日、入学式でもあるこの日の子供達の新鮮な笑顔は忘れられません。当時、長男は8才、長女のERIN（現SIS12年）は4才でした。新しい匂いがする校内。初めて顔を合わせる保護者や教職員の方々、私自身も含め皆が少し緊張しているようでした。

日本の学校とインターナショナルスクールを同じキャンパスに置き、プログラム、授業、経験、夢を共有すると言う素晴らしい目標を掲げての開校。「新しい形の学校・ふたつの違った学校が同じキャンパスにある」、この興味深い試みに参加できた喜びがありました。また、「5つのリスペクト」を妙に納得して、まだその事自体が何かを理解できていない2人の子供達に、家で説いていた事を思い出します。（自分自身、十分理解していたかは定かではありませんが・・・）

娘がOISのECP（幼稚園）在籍の時、学校ボランティアに参加する事で、子供達がどのような友達や先生方と接し毎日を過ごしているかを垣間見ることができました。まだ生徒総数もそれほど多くなかったけれど、OISの校長が、子どもひとり一人の名前、性格や子供達が学校で話す家族の事などをしっかり把握なさっていた事には驚きました。また、私の母が急死した事で変調をきたした娘をいち早く察知し、私を呼び止めて話を聞いてくださり、最初に母の死を受け入れなくてはならないのは私自身であると言う事、そして娘と一緒に「おばあちゃん」の死を受け入れるのだと言う事を、気づかせてくれた大迫先生（奥様）。その事は今でも心に深く残り、感謝の気持ちでいっぱいです。

当初、子供達がOISに通っていたこともあり、SISについてはあまり知ることがありませんでした。今思いなおしてみると、開校から数年間、OISとSISの保護者間でかなりの温度差と言うか、隔たりが

あったように思います。当時、私はOISの保護者の観点からしか見る事ができませんでしたが、OISでは生活スタイルや考え方などの違った外国人の保護者の方も多く、OISの保護者間でも理解し合えない難しさがありました。SISの保護者の方々と交流などは皆無に等しいものだったと記憶しています。「理想」と「現実」の落差、そんな事を感じていました。開校当初、保護者の私でさえそのような状態でしたので、教職員の方々は様々な点多々ご苦労があったらと察します。

娘が12才になって、日本に軸足を置いた暮らしを行うと決めた時、娘と話し合いSISを受験することになりました。SISに入学が決まったとき、喜びとは別に娘以上に心配したのは私だったかも知れませんが、同じキャンパスにあるといえども、全く違った学校と言う印象が拭いされていなかったのかもしれませんが、しかし、そこにはOISとSIS隔たり無く友情を育て、人間関係を構築していく子供達の姿がありました。息子もOISを去って数年、未だSIS・OISの友達と連絡を取り合い、青春のひとコマを共有しているようです。幸運な事にSISとOISのふたつの学校を経験できた娘、そしてその保護者としてふたつの学校を知ることができた私は、子どもを通じ、「真の意味でのコミュニケーションとは何か」を学んだように思います。

1991年の開校時、全く種類の違った2本の木をひとつのキャンパスに植えているかのように思えたふたつの学校。しかし、歳月を重ねる毎に、この種類の違った2本の木の枝は絡み合い、ひとつの大きな木になりつつある、「5つのレスペクトと言う学園の基本方針を軸に、新しい形のひとつの学校になりつつある」、今そう感じますし、またそうなってほしいと願うばかりです。そして、4才から18才と言う人生において最も重要な年月をこのキャンパスで過ごせた娘は、開校15年目の春、このふたつの学校から外の世界へと旅立ちます。ふたつだけ、ひとつ。ひとつだけ、ふたつの学校から生まれたたくさんの苗木。水や肥料をふんだんに頂き、他の木と枝を絡ませ共に成長をしていく事を学んだ苗木は、きっとどこかでしっかりと根をはり、やがてひとつの大きな木になるだろうと、そう信じています。

## 誇りに思うこの学校

深井美貴子

11年生保護者

SISに長女が入学してから、彼女自身はもちろんのことですが、親としても楽しい経験をいっぱいさせてもらいました。何年もこの学校で過ごす、なんだかあたりまえのように感じてきていましたが、あらためて考えてみるとやはりその多くはOISがあったからこそだと思います。

この春に初めてAPACのフィリピンからのサッカーチームの女の子二人を預かりました。今まで子どもから大人までいろんな留学生を短期から長期まで預かりましたが、3泊4日のこのときの経験はその中でも一番といっているほど楽しいものでした。18歳という年齢もあるのですが、他人のことを十分に思いやることのできる大人であり、かつうれしいときは無邪気に喜ぶかわいらしいところがある、すばらしい女の子たちでした。英語がしゃべれない長男、次女とも楽しそうに剣玉や写真の撮影会をしていました。きっとSIS,OISの生徒たちも海外に出かけたらこのように振舞っているのだと思うと誇らしい思いがしました。

また、先日は義母が入っている国際的な女性ボランティア団体ソロプチミストのユースフォーラムという催しがありました。「平和をめざして」というテーマで事前に論文を提出し、当日はその要約を発表、ディスカッションするというものでした。その日私は撮影のお手伝いに出かけました。SISから二人、ほかの高校から7人の参加がありました。日本語での論文発表だったのですが、正直ここまで違うか、というほどSISの二人はほかの学生とは違っていました。テーマに対する自分自身の考えを自分自身の言葉で人に伝わるように話す能力は特筆すべきものでした。プレゼンテーション能力というか、パフォーマンス能力というか、その場にいる誰もが実感していたと思います。

そのフォーラムの基調講演と全体のコーディネーターをつとめられたのが、大迫校長先生でした。このお話がまたすばらしく、ギターの弾き語りも飛び出して、普段いろいろな講演をよく聞く機会

のあるソロプチミストのかたがたも、終了後にはとてもすがすがしいお顔をされていたように思います。

結果は一位がSISの学生でした。もう一人のSIS生の発表もとてもすばらしかったのですが、彼女は当日のみの参加だったため、審査の対象にならず、審査員の方々からとても惜しまれていました。この日のことを後日国語の木村先生にご報告すると、先生は「彼女らは決して特別な生徒ではないのよ」とおっしゃいました。多分SISのどの生徒さんもこのような能力を自然に身につけておられるでしょう。それは、SISがOISとともにあることが大きな要因でしょう。なかなか自分の子どものそのような場面を見る機会も少ないでしょうけれど、保護者のみなさんにご自分のお子さんを自慢していいと思います。

11年生の長女は今、アメリカ・インディアナ州にYFUから一年間の留学中です。留学すると決めたとき、SISやOISの友人たちから「なんでこの学校にいるのに、留学なんてするの?」と言われたそうです。こんなにインターナショナルな学校は世界中探してもめづらしいのに、なぜわざわざほかの国に行くの?ということで、それは私自身も感じていたことでした。しかし、留学を決めたことで、彼女はあらためてSISの良さをはっきりと自覚することができたようです。その上で旅立つことができたことは、彼女にとってとても良いことだったと思います。もう少しで帰国する彼女が、ブランクの一年間を取り戻さんと、この学校を満喫するであろうことが楽しみでなりません。

そのほかにも祭り寿しづくり、京都町屋ツアー、サルサレッスン、スクラップブック、インターナショナルフェアなどなど、両校の保護者の方がたとさまざま楽しい行事に参加してきました。でもSIS保護者でいられるのは、あっという間にあと1年半あまりになってしまいました。

今年はこの学校ではじめての委員をさせていただきます。Hospitality Committeeです。SISとOISの生徒があたりまえに仲がよいように、私たち親もただ普通に仲がよい関係をつくれるよう、文字通りホスピタリティの気持ちで少しでもお役にたきたいと思っています。

## <100号記念特別寄稿> 学期完結男

真砂和典

教務センター、理科

柴田昌洋

SIS第10期卒業生

こんなメールが転送されてきた。

拝啓。葉桜の季節となり、SISの皆様におかれましてはますますご活躍のことと存じ上げます。ご無沙汰しております。私、SIS10期生2003年3月卒業生、柴田昌洋と申します。

さて、このたび私は国際基督教大学において教職課程を学習しておりまして、「教職課程・教授法論」なる講座を受講しているのですが、このたび「母校のカリキュラム分析」をすることになりました。つきましては、カリキュラム決定の過程をお教えいただきたいのです。何が考慮され、誰によって、どれくらいの時間をかけて、等々です。

お手を煩わしまして真に申し訳ございません。恐縮ですが、ご返事をお待ち申し上げます。敬具。

柴田君

元気に活躍しているようですね。東京での生活はどうでしょうか？

ぼくは生まれてから24歳までずっと大田区にいたので懐かしいです。

早速、依頼の件ですが、学期完結制のはじまりについては学校のホームページの中の研究紀要6号というところに詳しく書かれていますから読んでください。

その中のぼくの文章と学期完結制を説明するときのパワーポイントを添付しておきます。「分析」がんばってください。何かほかにも必要なものがあれば言ってください。 真砂

真砂先生へ

これはどうも、ご無沙汰です。返事が遅れて申し訳ありません。

武蔵境は東京郊外ですから、ちょうど箕面みたいでいいところです。畑で野菜を買って安い、なんていう東京とも思えない生活をしています。

学期完結制のはじまりとパワーポイント、おおいに助かります。ありがとうございます

ざいます。

もしよければ、各教科がどれだけ授業を開くか、どういう授業を開くか、といったことを決定する過程をお教えてください。 柴田

こちらでも返事が遅れてすみません。

質問の答えは研究紀要6号に各教科が一部、書いているかもしれません。

まず、学校として、学期ごと(週5時間の授業は全60時間、週4は48時間、週3は36時間、週2は24時間)に授業をまとめるということと自由選択という基本方針を示しました。そして、開講される授業数や内容はそれまでの実績をもとに各教科でじっくり話し合っただけ、最後に、教務センターと詰めていきました。 真砂

丁寧にご返信ありがとうございました。

これで発表もうまくいきそうです。

いつでもS I Sには注目しています、期待しています。

これからもがんばってください。

実習は二年後ですが、またそれまでもお伺いすると思います。それではまた。 柴田

発表がうまくいくことを祈っています。

経験者として、また外から見た者として、学期完結制についての意見を今度学校に来た時にでも聞かせてください。

真砂

これで、私は1, 2年後に柴田君と会って話を聞くことを楽しみに、直面している「20分ブレイク」の立ち上げと来学期の授業選択の準備に全力を注ぐつもりだった。ところが、ここがSIS卒業生の他とは違うところだ。思わぬ展開は以下のメールから始まった。

こんにちは。何と言うか、真にお恥ずかしい限りですが、正直申し上げれば、「適当にやっつけ」るつもりでした(調査発表課題を4つ持っていて...模擬授業もありました)。

しかし諸先生方の研究紀要を読んでためさせられました。本当に頭が下がる

思いです。

少し課題の外に出るかもしれませんが、深くつっこんでいきたいと思い、再度メールした次第です。

さて、早速ですが、研究紀要を一度通して読んでみた感想、いくつかの疑問点等を挙げたいと思います。

学期完結制のデメリットとして挙げられている諸点に対し、どのような改善の取り組みがなされているか。また、その優先順位は。

デメリットの例：一年を通じての授業ができない 交流が十分に深まらない 一学期ではできないものもある ある学期の間、まったく勉強されない科目がでる 学年の差が習熟度の違いを大きくする 生徒が大学の進路を考えた選択をする やる気がない 他はとらない

授業が毎日あるため教師、生徒の負担が増大する 教師も生徒も休めない

いくつかのデメリットを抑えるべくコースアドバイザーの責任が重いように思われるが、アンケートQ11によれば、授業選択の相談相手九割は「先生」となっている。彼等は授業選択の相談相手たるべく訓練されているか。つまり、各科目に関する多様な情報を持ち合わせているか。

とりあえずは以上です。研究紀要は何度も読み返すつもりですので、またメールをさせていただくと思いますが、よろしく願いいたします。

最後に、研究紀要を読んだ感想を言わせてもらえれば、学期完結制がもたらした大きなものの一つに、各教科が各授業を土台から考え直したこと、があると思いました。

以前のそれぞれの授業は完成に近づいていたと思いますが、壊すことも無意味ではないと思います。新たな器、可能性が生まれますし、それらは過去の経験、記憶の上に成り立っているのですから。もちろん、産みの苦しみ、そして、完成に至らぬまま壊さねばならぬという苦しみは生半かなものではないですが、まあ、これでS I Sもしばらくは落ち着けますか？

ともかく、そうした苦しみすらおくびにもださなかった先生方に敬服します。あ

るいは気付けなかった自分を恥ずかしく思います。これからがんばってください。それでは、また。 柴田

君のメールを読んで、本当にうれしく思っています。それなのに、もう10日も返事を出せずにいました。ごめんなさい。ぼくはいつもそうなのですが、素晴らしい手紙や文章をもらうと返事が出せなくなってしまうのです。それに対する思いが頭のなかで渦を巻き、どんどん膨らんで押し潰されるのです。一生懸命書いてくれた人に返事を出さないのはけっこう辛いものです。それ以前に、とても失礼です。自分に「筆不精」というレッテルを貼ってなんとかやり過ごしてきましたが、ぼくの引き出しや心の片隅にはそんな文章が多くしまわれたままになっています。

さて、こんなことを書いているとまた、すべて Delete したくなるので、やけくそで、これまでのやりとりをまとめて「学期完結男」とタイトルをつけてみました。実は今、馬場先生がインターカルチャ100号記念の記事を保護者や卒業生から集めています。正確にいうと、集めていました。期限が5月20日だったので…。まあ、こんな妄想をエネルギーにして返事を書いているということなのです。

では、実務的に本題に入ります。君の質問を再掲して、項目ごとに答えます。

学期完結制のデメリットとして挙げられている諸点に対し、どのような改善の取り組みがなされているか。また、その優先順位は。

一年を通じての授業ができない

なかなか鋭いところを突いてきますね。去年の秋にSISで研修会を開いた時この話題がでました。解決策としてはこれから国語科でやろうとしているように、週5時間の授業を週2、3時間に分けて、小さなかたまりにするということがあります。小さなものならば、取りやすいので、継続して、ステップアップしながら選択することができます。そんな改革を準備中です。

ただし、それでも、同じ担当者がずっと1年続くということはないと思います。しかし、これは1年サイクルというこれまでの学校の常識に囚われているために起こる違和感ではないでしょうか？

確かに交流を深めるには1学期よりも1年の方がいいでしょう。では、同じ教師が2年や3年続けて担当の方がよりいいのでしょうか？ 同じ教科でもいろいろな教師に教えてもらう方がいいし、学期完結制の授業選択の中では、自分に、より合った教師を選ぶ可能性もでてきます。そして教員の側からも、ある生徒を高校2年の時に担当するだけというよりも、高校の3年間のなかで間隔をあけた何学期かを担当できるというのは、その生徒の成長を見ることができて、楽しみが増えます。

学年の差が習熟度の違いを大きくする

これは教科、科目によって違いがあるでしょうね。例えば、私が担当している化学や論理的な思考という授業は中学3年生から高校3年生までの4学年オープンですが、ほとんど困ったことはありません。下の学年の方がよくできることも多いですね。それに対して語学などで精神年齢によって受け取り方が違う教材を扱う時は問題が起きるでしょう。英語では中学3年または高1編入生用の授業をつくり、4学年オープンから3学年もしくは2学年へと変更しました。国語ももともと1学年または2学年対象の授業構成になっています。このように教科や教材の特性でそれぞれに対応すべきだとは思いますが、基本として無学年制を考えているのは、本校の生徒達が学年に縛られないほど個性的なこと、海外現地校などでの学習進捗が様々であること、そして、どんな勉強をいつするかということも生徒に選択させたいからです。

生徒が大学の進路を考えた選択をする

これはある意味、当然のことですよ。ほとんどの高校が進学を考えたカリキュラムを生徒に与えているのが現実です。それよりは、いろいろな将来の選択肢を考えて、生徒が自分で選んで授業を取っていく方がやる気が出るのではないのでしょうか？ SISは「受験指導はしない」と言ってきましたが、それは、押し付けはしないという意味だと思います。進路に関する情報はいくらでもありますし、授業選択のための資料は毎学期いろいろと工夫を凝らして渡しているつもりです。これも、学期完結制7年目に入った経験を生かしています。それで、生徒はどうなっているかというと、煽られていない分、低学年ではのんびりしている

ようですが、授業選択をしながら自分の将来と今の勉強を真剣に考えるようになってきていると思います。少人数制をとっていることでもあります。これほど多くの生徒が教員に勉強や将来について話をもちかけてくる学校は少ないのではないのでしょうか。やる気のある生徒がほとんどですね。高校3年になっても受験とは直接関係のない科目をこれほど取っている学校も珍しいと思います。長い目で自分の将来を見つめているのでしょうか。親はハラハラすることもあります。うちの子供もSISの8年と11年になりました。

授業が毎日あるため教師、生徒の負担が増大する

7年前は週5時間を基本として授業を組み立てました。もちろん、週2、3、4時間の授業もありましたが、その後、授業をしながら、時間を減らした方がやりやすいというものは、そのように変更したり、ふたつに分けたりしています。柔軟な体制を取れるようになっていたことはとても大切です。そして、この秋学期からの改革として「20分ブレイク」を4時間目と5時間目の間に作ります。詳しいことは別の添付ファイルでお知らせしますが、2時間や3時間の授業を増やすことと関わってくると思います。上に書いた小さなかたまりを生かし、選択の幅を広げるための改革です。授業をたくさん取って、

「めしどこか たのむ」

と叫ぶ生徒だけのために、20分ブレイクができた訳ではありません。

いくつかのデメリットを抑えるべくコースアドバイザーの責任が重いに思われるが、アンケートQ11によれば、授業選択の相談相手九割は「先生」となっている。彼等は授業選択の相談相手たるべく訓練されているか。つまり、各科目に関する多様な情報を持ち合わせているか。

授業選択のための質問の半分以上は、ある科目の内容やそれが自分の進路にどのように繋がるかというものです。これらの質問には各担当がそれぞれの専門に応じて答えるのが一番ですね。また、生徒には、それぞれに相談しやすい教師とか、話を聞きたい教師があるでしょうから、授業選択をきっかけとして話が広がっていく場合には少数の担当者に限ら

れるのはよくないですね。ですから、相談相手の九割が「先生」であるのは頷けます。もちろん、授業選択の仕方とか全体に関わる相談はコースアドバイザーが受け付けています。しかし、学期完結制が始まって数年経った頃から、特別な訓練はしなくても、開講科目一覧を書いたり、生徒と一緒に説明を聞いたりしているうちに、それぞれの教科や校務分掌でいろいろな相談にのってくださる教員は増えてきました。

さて、今回の質問に対する個別の返事は以上です。柴田君がカリキュラムの研究を深くつっこんでやろうと決意したのに、ぼくの対応が遅れて済みませんでした。研究紀要を読んで考えてくれたことはとても本質的なことだと思います。学期完結制開始当初のデメリットの多くは新しいことを始める時に必然的に起こる現象です。公的な保護を受ける教育というテーマの中で、大勢の人々が関わるために、学校という組織は変化することが大変難しい状況になっています。しかし、違和感や保守性を押さえて先に進む勇気が大切だと思います。失敗からも学ぶのが学校本来の姿ですよ。そんな中での君の言葉は、大いに私達を励ましてくれます。

卒業時の贈る言葉にも書きましたが、

君達の学年からが実質的に完全な私たちで学期完結制のカリキュラムを受けた生徒達なのです。そういう君達は私達の希望なのです。傲慢な意味に取らないでもらいたいのですが、教師の仕事の成果を受け継いでくれるのはその教え子達なのです。というか、それしか私達にはないのです。 真砂

丁寧なお返事、どうもありがとうございます。

今時間がないので、簡単な感想で失礼させていただきます。

「高校3年になっても受験とは直接関係のない科目をこれほど取っている学校も珍しいと思います。」とのことですが、そういう生徒が多いのは本当に誇りですよ。私もSISがすごく誇らしいです。

どうも昨今の事件を見るに、将来を考えるという長期的な視点がかけていることが多いように思われます。後先を考えない、あるいは周りを見ない行動が。想像力とかコミュニケーションの不足も言われますが、この、空間的にも時間的にも広い視野、この不足が根本的ではないか、と私には感じられます。

SISの人たちには長い時間を経て、そしてもちろん国を越えて賞賛される、そんな「古典」を作ってほしいですね。願わ

くは学期完結制もまたそうなりますように。そして常に新たな古典を作り出しますように。

おっと私もがんばらねば。よく生きて、先生に恩返ししなければなりませんからね。

それでは、また。 柴田

本校は、1998年度より、それまでの4学期制から各学期同授業日数の3学期制(60日×3)へと移行しました。4月～6月を春学期、9月～11月を秋学期、12月～3月を冬学期と呼んでいます。

また1999年度には、大阪国際文化中学校・高等学校(OIA)から千里国際学園中等部・高等部(SIS)へ校名変更。同時に、中3以上の授業は一部を除いて「学期完結制」となり、高等部では学期ごとに単位が認定されるようになりました。このため、各学期で履修科目、時間割が変わります。

## SIS学校説明会のお知らせ

アドミッションズオフィス

	日程	時間	内容
第1回	5月18日(水)	13:30 -	学校全体紹介。施設案内・個別相談有り。
第2回	6月15日(水)	13:30 -	本校の英語教育の紹介。個別相談有り。
第3回	7月1日(金)・2日(土)	13:00 -	個別相談会(要予約)
第4回	9月17日(土)	10:15 -	オープンキャンパス形式 (教科・対象者他については後日更新します)
第5回	10月22日(土)	14:45 -	オープンキャンパス形式 (教科・対象者他については後日更新します)
第6回	11月12日(土)	10:00 -	入試要項説明。個別相談有り。

( 終了 )

30分前より受付開始。いずれも約2時間の予定。個別相談は希望者のみ。7月を除き予約不要。上履き不要。

説明会当日の個別相談は、人数と時間の関係で1人当たり15分程度になります。個別のご相談は随時受け付けておりますので、ご希望の方は入学センター(072-727-5070)にお申し出下さい。

# インターカルチャ第100号発行を迎えて

馬場博史

広報センター長、数学科

千里国際学園開校の1991年10月に発行された「インターカルチャ」第1号が手元にあります。最初はB5版の5ページでスタートしました。初代校長藤沢皖先生（現外務省大臣官房人事課子女教育相談室長）の筆なる題字は、このときから今もずっと使い続けています。

私は93年4月に赴任したのですが、自分のコンピューターも持っていないのに、前任校で数学のソフトを作成したりしていたからでしょうか、いきなりDTP（Desktop Publishing = 出版物のデザイン・レイアウトをパソコンで行なうこと）での「インターカルチャ」編集を任せられました。前任者から簡単な説明はありましたが、マニュアルもなく手探りで作り上げた初めてのインターカルチャ17号は26ページの大作でした。当時は要領が悪く、昼食はカフェテリアでとり、弁当を夕食にして残業をするという

ことが何度もありました。

その後編集作業に慣れて少し余裕ができ、「読む人の立場になって編集しよう」と決心したのはいいのですが、載せたい情報を考え、自分から取材、または原稿の依頼をするうちに記事がどんどん増えていきました。

私が担当した1年目までは、保護者会広報委員の方に学校で印刷していただいて発行するという、いわば手作りの広報誌でしたが、あまりにも記事の量が増えたため、94年度からはA4版に変え、印刷は外注することにしました。

とても職場だけでは仕事が追いつかなくなり、家でパソコンを購入したのですが、「自分で自分の首をしめる」とはこのことでしょう、気がついたときには休日も長時間パソコンの前で編集作業をせざるを得ない状況になっていました。

96年度には一度担当を離れたのです

が、またその翌年から引き受けることになり、とうとう今年度で「インターカルチャ」編集者として12年目を迎えることになりました。そして今回100号という通過点を迎えたわけです。

編集は長時間かかる上、難しく大変な作業ですが、読んだ方から「楽しく読ませてもらっています。」とか「発行が待ち遠しいです。」などと言っていただくのを励みになんとか頑張っています。

これまでに記事を寄せてくださった皆さん、感想や意見を下さった皆さん、保護者会広報委員の皆さん、イラストレーションクラブの生徒諸君、ご協力ありがとうございました。これからも「読むのが楽しみ」と言われるような、内容の充実した「インターカルチャ」を目指します。よろしくお願ひいたします。

## プレイバック「インターカルチャ」（1999/05より）

特別な春（抜粋）

大迫弘和

SIS校長

「私が\*\*からの帰国生徒だと分かる、その国について色々尋ねてくれる。それはそれで嬉しいのだけれど、ふと気がつくんです、質問はその国のことばかりで、私のことはなにも聞いてくれないなって。」

この学園で出会うこのようなことば。今までも私なりに大切に大切にしてきたつもりですが、そのような姿勢だけは、これからも、何があっても失うまい。

千里国際学園中等部・高等部（SIS）という新校名のもと、学園は9年目の歴史を歩みだしました。この春は学園にとりまして、学期完結制、という学習の形における画期的な取り組みをスタートさせる、特別な春でもあります。

「ね、あなたは英語はどのクラスにしたの？」

「私はLL2。あなたは？」

「LC9をとることにしたの。どんな

授業かな、楽しみだなー。」

「そうね、なんか、わくわくするわね。」

生徒それぞれが、正に学園が望む形で、即ち、友達が取るから自分も、といったレベルの選択でなく、自らの自立的な判断に基づき科目を選択しています。正に、SISの生徒のよき文化があって初めて成立していくシステムであると、あらためて思うのです。そして同時に、生徒の「わくわく」に十分応えられるような授業を提供していかなければならないと、深く責任を感じるのです。

（中略）

親というものは、赤ちゃんのころから、ずうっと我が子を見つめてきて、そしていつか自然に「その子にちょうどいい大きさの期待」というものに気づいていくものなのではないだろうか、と、そんなことを思っています。

私の父母も、そうであったように、いま、ふと、気づくのです。

「ちっちゃな体で、幼い頃は病気ばかりしていて、ただ知的な好奇心のようなものだけはずいぶん強そうな」そんな子を我が子として持った私の父母の思いを、ふと、思うのです。

強い意志力と穏やかな心を持って、与えられた責務に、力を尽くしてまいります。

一人一人の生徒を、私は今日、大切に出来たか？

問いかけを続けつつ。

# 学園祭 テーマ「60年代70代」

今年も学園祭週間は、日替わりで仮装をしようという「不思議ウィーク」(月曜:「祭り」、火曜「帽子」、水曜「記念日」、木曜「スポーツ」、金曜「すべて」)で盛り上がり、5月28日(土)の当日は好天に恵まれ、テーマ「60年代70年代」に沿った模擬店やステージなどでさらに盛り上がりました。



# 論文・ディベートで優勝

## 国際ソロプチミスト主催クラブフォーラム

松田真依

高等部3年

今回私が参加した国際ソロプチミスト主催のクラブフォーラム。私はここで本当に貴重な経験をしました。国語の時間に先生が話をしていたフォーラムの募集要項を読んだ時に「このテーマで自分の意見を書いてみたい」と思い書いたのが紹介していただいた「女性の役割と責任」という文章です。

私は以前からこのことに関して興味があり、自分なりの考えを持っていました。私は小論文にも書きましたが、「女性は家庭で幸せを見つけられるはず」という考えでした。

他の学校からきている子たちもあまり変わらず、「女性は家庭派」の子がほとんどでした。ですが、フォーラムを来られていた私たちの人生の先輩ともいえる人たちは、さまざまな意見を持っていらっしかったです。

ディスカッションの初めは、参加生徒が自分の考えを小論文をもとに3分間説明し、その後、参加生徒を中心にディスカッションが行われました。コーディネーターから求められた意見は「平和とは何か」、「家庭での女性の役割」、「学校に求める歴史教育（戦争）」などでした。

私は「平和とは何か」と言う質問に対し、「男女平等」の話をしました。女性専用車両やセクシャルハラスメントなど、女性が社会に出始めてから女性を保護する物事が増えたように思います。女性は平等を求めるなら、男性と同じ条件を覚悟するべきではないのか、という意見を述べたのですが、後でおおいに後悔することになります。

私たちがディベートしている際、フォーラムに来られていたみなさんはずっと真剣に話を聞いてくださってすごく嬉しかったです。ディスカッションの後半、コーディネーターとして参加されていた大迫校長がフォーラムに来られている方々と私たちに「意見や質問などありませんか？」と機会を作ってくださいました。

この時に話してくださった方の話が私を後悔させる事になりました。

1人目の方は「女性は家庭だけではなく社会にもっと進出して政治に女性の意見を入れていかなければ世界は平和にならない。」という意見、2人目の方は会社の社長をされている方の話だったのですが、「私の会社では男子も女子も人材を求めています。ですが、やはり男性と女性は出来る仕事の違いがありますね。お互いが出来ることや出来ないことを支えあっていくことが重要なんじゃないでしょうか。」このお二方の話を聞いた時に、「こんな考え方が出来るのは女性独特かもしれない。女性は社会に進出して“お互いフォローしあう”という男女平等を皆に伝えようとしているのかも知れない」と感じ後悔していました。「やはり女性は社会に進出するべきなのか？」と悩んでいたのですが、我慢できなくなって参加されていた方々に「今まで皆さん仕事をとるか子どもをとるかなど色々悩んでこられたと思うのですが、もしよろしければ経験談のようなものを聞かせていただけないでしょうか。」と意見を求めました。すると、現在中学校で音楽の講師をされている女性が私たちに話してくださいました。その方の話は、女性は仕事という考え方ではなく、私と同じ「家庭に母親は重要」という意見でした。その方は、音大を出られて講師として仕事をされていたそうなのですが、お子さんができ仕事をいったんおやめになったそうです。子どもが大きくなるまでは子育てに専念されたとおっしゃっていました。ですが、子どもが大きくなってからやはり「講師になる」という夢を持っていたのもう一度がんばって仕事に復帰する事が出来ました、と私たちに詳しく話してくださいました。その話を聞いて、「ああ本当に人それぞれなのだなあ」と身近に感じる事ができて本当に聞けて良かったと心から思いました。

私一人の意見として全然発展しなかった「女性の役割と責任」についての今回のディスカッションは本当に貴重なものでとてもいい経験をしました。一般の方々

が大勢いる前でディスカッションをしたこともそうですが、それ

以上に私たち若い者の意見と、私たちにあって人生の先輩ともいえる方々との意見が交換でき、また違う方向から同じ問題を考えるようになり、そしてまた新しい考え方をすることができるようになったと思います。もちろんそれは私だけではなく、フォーラムに参加していた人はみなそんな風を感じたことではないでしょうか。

今回優勝したことで、夏休みに軽井沢で海外留学生と共にまた「平和について」話をするフォーラムに参加できる事になりました。今からすぐ楽しみにしています。今回の人生の先輩からの意見だけではなく、次は他国の方々の意見を聞くことができるので更に違う方向から「平和について」考えられれば良いなとおもっています。

<入選論文>

「平和を目指して～女性の役割と責任～」

今回の「平和を目指して」のテーマで私が注目したのは「女性の役割と責任」だ。近年、女性の社会進出が一般化してきている。だが私はここで社会問題の1つとして「家庭後退」をあげたい。

昔、「男性は仕事、女性は家庭」という固定観念が一般的な考え方だった。しかし、最近では「そんな固定観念は男尊女卑だ」といわれることが多い。はたして「男性は仕事、女性は家庭」という考え方は本当に男尊女卑なのだろうか。私はそうは思わない。女性がどんどん社会に進出していくことを否定するわけではないのだが、女性には女性にしか味わえない幸せがあるのではないかと私は思う。その良い例が、「子どもを産むこと」である。

男性と女性の違いでまず思いつくのはここではないだろうか。私はこの事を本当に「幸せな事」だと思うのだ。女性の社会進出が一般化しすぎたことで、少子化問題が深刻化してきていることも事

(次ページ★に続く)



# 達成感のある10日間

## ワールドリーダーズ・サミットに参加して

青木光理

高等部3年

私はこの春休みにアメリカで行われているプログラムPresidential Classroomの一つ、ワールドリーダーズ・サミットに参加しました。このプログラムには13カ国から300人以上の同世代の仲間が参加し、今世界で注目されている問題について各国の代表となり話し合いました。毎日新しい友達ができ(最終日にはじめて会って友達になる子もいたのにはびっくり)、日本ではなかなか友達同士では話さないような問題を食事中にまで夢中で語り合ったのは本当に夢のようでした。2日目にはカントリープレゼンテーションが行われ、各国の文化をじかに感じる事ができました。日本代表メンバーはソーラン節を踊り、またアメリカ出身の日本代表メンバーに着物や、制服を着てもらいプレゼンテーションを行いました。着物や日本の制服に初挑戦の彼らはとても喜んで着てくれました。着物をきてのあぐらにはびっくりさせられました。拍手喝采で終わったプレゼンテーションはリーダーズサミットのよいスタートとなりました。

毎日朝8時から各国でそれぞれのワーキンググループで話し合った問題について議論し、日本としての意見をまとめました。私のワーキンググループの話すテーマは世界中で問題になっているエイズに決まり、日本代表会議でエイズの教育について話し合うと、日本の意見をまとめるのに、アメリカの状況と比較したりなどすごく面白い議論ができました。またほかのワーキンググループの話し合うテーマもとても重要で一人ひとり考え方も違い、また日本の考えかたを理解しまとめるのが難しく困難なこともたくさんありました。またこのような問題を考える上で、日本の大使館を訪れて貴重な話を聞いたことや、世界で今活躍している憧れのリーダーたちにお話を伺ったことはすごく貴重な体験でした。大使館の方は答えにくいのを承知でした自衛隊や憲法の問題の質問にも、国の考えまたその人個人の考えを真剣に語ってくださいました。いままで想像もしていなかった回答に驚かされました。そして一日の最後を締めくくることがワーキンググループでのエイズについての会議です。各国の意見、各界のリーダーへの質問で得た知識を利用して、最後の日に全員の前で発



表する解決法コミュニケを作成しました。私たちは、エイズを防止するための教育、また無料で診断テストを受けられることなどを重視してコミュニケを作成しました。残念ながら私たちのコミュニケは一つの国が賛成しなかったので通りませんでした。このコミュニケを作るために何時間も議論を積み重ねたことは本当によい思い出です。このサミット中に扱われたトピックはどれも今の世の中で0にするのは難しい問題ばかりで、そう簡単には解決できませんが、300人をこす仲間でも話し合ったことに大きな意味があったとおもいます。ここでであった仲間やまたいろんな人と、自分の国の利益だけでなく地球全体の利益を考え、世界の問題を解決に導けるような議論を繰り広げられることを望みます。このサミットに参加したことは自分の夢に大きな前進をした気がします。参加するにあたって応援してくれた家族、先生、友達そして共にあの達成感を味わったみんなありがとう。

(★前ページの続き)

実。実際、世論調査で「子どもを産みたいですか?」という質問に対し、「NO」と答えた人が多数いたという。その理由は「子どもに使う時間やお金があるのなら自分に使いたい」「もっと仕事がしたい」などやはり社会進出が大きく影響している。確かに、子どもには手間がかかるし養育費もかかる。だが私は、それらを犠牲にしてもそれ以上に得られる幸せは大きいのではないかと思うのだ。それに加えて、「家庭を支える事」も女性の重要な役割であり、責任であるように感じる。疲れて家に帰ったとき「おかえり」という言葉とともに手作りのご飯が用意されていると感動する。この気持ちは、男性も同じだと思う。夫婦共働き

だった場合、どちらが先に帰ってくるかわからない。帰っても誰もいない家には「おかえり」の言葉もなく、ご飯の準備はされていない。どんなに疲れていても自分がしなくてはならない、となるとお互いが疲れきってしまうのではないか。だからといって私は女性だけが家庭に残らなければならないと言っているのではない。だが、赤ちゃんの能力の1つに「自分の母親の母乳を嗅ぎ分ける」という能力がある。赤ちゃんは、母親を求めているのではないだろうか。どんなに子育てに自信がある男性でも、母性本能に勝るものはないのだと私は思う。

家庭で子育てをしながら家事をこなし、家族がくつろげる家庭を作る事。そして、その家庭をしっかりと支えていく

事。更にこれらに責任と誇りを持つ事。実は、これは女性にしかできない事であり、女性にとっての本当の幸せではないだろうか。パートナーだけではなく、身近な人ときちんと支えあっていくことで、1人で悩んだりする事も減り、幼児虐待や心中などという最近目立つ事件も減少するのではないかと私は思っている。

私たちが求めている「平和」の基本は、まず足元を固めること。家庭こそ一番小さな社会である。健全な家庭があれば、そこには健全な人間が育つ。健全な人間が集まればそこには健全な社会が出来る。そうすれば平和な社会が築け、戦争など無縁な世の中が来ると思う。

# バイリンガル通信

## バイリンガリズムの利点と欠点

難波和彦

英語科

前回のこのコーナーでは、井藤先生がバイリンガリズムの定義いかに難しいかについて、書いてくれました。実際に、Li Wei (2000) という学者が調べたところ、40近いbilingual という言葉のバリエーションがあったそうです。変わったところでは、diagonal bilingual (対角線上のバイリンガル) などという言葉もあるようです。バイリンガリズムに対する人々の態度は、20世紀半ばごろはまだ否定的なもので、例えば学校で標準語でない言葉をしゃべったら、石鹸で口を洗わされたり、鞭でうたれたり、ということがありました。しかし、20世紀後半に、国際化と情報化が進み、人や情報が国境を越えて行き来するようになり、ふだんの生活の中で、複数の言語に接することは、珍しいことではなくなってきました。言語学などでもバイリンガリズムを専門的に研究する人が増えてきて、実は欠点よりも利点のほうが多いのではないかと考えられるようになってきました。

実際にバイリンガルであるということでのどのような利点があるのか、Colin Baker (1998) は、コミュニケーションをとる上での利点、文化的な利点、思考能力の利点というようにカテゴリー分けしたうえで、8つの項目をあげています。

1. コミュニケーションをとる上での利点 1) 両親との関係：国際結婚で両親が別々の言語を使う場合、子供がバイリンガルであれば、それぞれの親は自分の言語で、子供とコミュニケーションをとることができます。親子関係の微妙なニュアンスなどを考えると、親は自分の最も得意とする言語で話かけたいものでしょう。2) 親類との関係：同じく国際結婚の例ですが、国際結婚カップル同士は、なんらかの形でちがった言語間でのコミュニケーションをとっているわけですが、その親や親類同士は、全くのモノリンガルで、父方の親類と母方の親類では、会話がなりたないかもしれません。そんなときに、父方の祖父母と母方の祖父母の間にとって、バイリンガルの孫が、コミュニケーションの手助けをすることが

できます。3) コミュニティーとの関係：バイリンガルはコミュニティーの中で、モノリンガルよりも、幅広い層の人とコミュニケーションをとることができます。OIS/SISというコミュニティーを思い浮かべてみるといいでしょう。日本語と英語二つの言語を使えることにより、人の輪、活動の幅がぐんと広がります。4) 国を超えたコミュニケーション：言葉が、国や民族間の障壁になっている場合があります。バイリンガルは、家・コミュニティー・社会の中での言葉の障壁を低くし、架け橋としての役割をしてくれます。5) 言葉に対する感受性：バイリンガルは、コミュニケーションをするときに、聞き手や状況に合わせて言語を選んだりしているので、コミュニケーション上、どんなことが必要かということに対して、敏感です。例えば、OIS/SISで、ミーティングやみんなの前で話をする機会などがありますが、例えば日本語がそんなに得意ではない人が聞き手の中にいるときには、熟語などの難しい表現を使わずに話をするとか、ここは通訳をしてあげないといけない、というようなことに気をつけなければいけない場面がよくあります。バイリンガリズムの度合いが高い人ほど、このことに敏感だということは、確かにいえると思います。またバイリンガルは、聞き手としても優れていて、ある言語がそんなにうまくしゃべれない人に対しても、我慢強く聞いてあげることができるようです。

2. 文化的な利点 6) 二つの文化を体験できる：言語の背景には文化があります。ある文化を理解しようと思ったら、その言語を通してでないと、できないこともあります。二つの言語が使えるということは、二つの文化を体験できるということです。それはものごとを違った角度から見ることができるということにもつながっていきます。7) 経済的な利点：バイリンガルは、より幅広い選択肢から仕事を選ぶことができます。自分の国だけでなく、世界に出て行って働くこともできます。また今までにある職業でも、

バイリンガルであることが、だんだんと求められるようになってくるかもしれません。

3. 思考能力における利点 8) 最近の研究では、バイリンガルは、思考能力において、モノリンガルよりすぐれているところがあるかもしれない、ということを示唆しています。バイリンガルは、ある物体や考え方に二つ以上の名前や言い方があることを知っています。例えば日英バイリンガルの子供は、ワンワンほえている動物をあるときは、「犬」といい、あるときは“dog”ということを知っています。あの動物は、絶対に「犬」という名前と呼ばれなくてもいいわけです。英語とアフリカンス語のバイリンガルの子供たちに行った実験で、犬を「牛」と読んで、牛を「犬」と呼んでもいいか、という質問をすると、モノリンガルの倍以上のバイリンガルのこともが、それはかまわないと答えたとのことです。また別の実験では、鳥を「スパゲッティ」と呼ぶことにすると、「スパゲッティが飛ぶ」と言ってもいいか、と言う質問に対してやはり、モノリンガルよりも、バイリンガルのほうが、可能だと答えた割合が多かったということです。(東、2000より引用)モノリンガルは、「犬」や「スパゲッティ」他の呼び方で呼ぶことが、許容しにくいのですが、バイリンガルは、頭を切り替えて考えることができるわけです。バイリンガルは、言語の違いを早いうちから認識していて、想像をする力や、物事を柔軟に考えることに優れているようで、このことが、思考の発達にもよい影響を与えているのかもしれない。

バイリンガルであることの欠点として、考えられるのは、アイデンティティーの問題でしょう。自分はいったいどちらの文化に属しているのか？バイリンガル・バイカルチュラルの度合いが高いほど、このことに直面するかもしれません。これはモノリンガルのものさしで、バイリンガルを測ろうとするから起

(次ページ★に続く)

# 卒業生教育実習で奮闘

教育実習を終えて

石塚真美

第4期卒業生

5月9日(月)から28日(土)までの3週間、英語科の難波先生のご指導の下、教育実習生としてお世話になりました。私が高等部に在学していたのは、2年半住んでいたマレーシアから帰国してからの1年間という短い期間でしたが、優しい友人達と先生方に恵まれた楽しい高校生活を送ることが出来ました。卒業後は大学で心理学を学びながら、カウンセラーを目指していたのですが、塾講師や家庭教師のアルバイトを通じ、教育の奥深さに惹かれ、次第に学校教育へ関わりたいという気持ちが強くなりました。大学院を卒業後、現在は佛教大学文学部英語英米文学科の課程本科にて教職を学んでいます。今回、卒業生として母校での教育実習の機会を与えていただき、本当にありがとうございました。

実習では、難波先生が教えていらっしゃる中等部の7s Englishと高等部のEnglish Structure 1を担当させていただきました。7s Englishのクラスでは、入学したばかりの生徒たちが毎日目を輝かせ、楽しそうに英語の授業に取り組んでいました。English Structure 1では、明るく元気で活発な生徒が多く、授業に不慣れな実習生の私を温かく迎えてくれました。その優しくサポートティブな雰囲気、随分助けられました。初めは失敗も多く、うまく授業を進められずに落ち込むことや、事前に教案を練っても、実際の授業で実践するまでは、わからないことがたくさんありました。また、両方のクラスともに、一人一人の生徒達の感性の鋭さや、授業中の反応のよさに驚かされることも多く、「もっともっと、楽しく、魅力的な授業になるように頑張ら

なくては」と毎回工夫を重ねました。何より嬉しかったのは、毎回の授業が終わるたびに、「先生、今日はありがとうございました」「頑張ってくださいね」と生徒に励ましの言葉をかけてもらえたことでした。

HRでは8-3にお世話になり、学園祭に向けて、オリンピックの競技を模した8つのミニゲームのお店「8リンピック」の企画に取り組みました。3人のお店係を中心として、8つに分かれたグループごとにそれぞれのアイデアが光るミニゲームを考え、準備をしていました。HRにおける活動を通して、生徒達の発想の柔軟性や個性が現れる取り組み方を見て、今まで自分が教科書を読み、勉強するだけでは実感がわかかなかった学級活動の重要性を深く感じました。特に、お店係の3人が、当日の仕事の割振りや休憩の取り方などの細かい調節などに悩みながらも一生懸命に責任を持って取り組む姿が印象的でした。学園祭当日の8-3のみんなは、本番に強い底力を感じさせる活発さで、見事最後までお店を続けました。たくさんのお客さんがミニゲームを楽しみに来てくれたので、本当に良かったと思います。学園祭も終わり、実習生として最後の挨拶を終えた後、HRの生徒から、手紙をもらい、予想しなかったことに、思わず涙がこぼれました。実習の最後に、生徒達の優しく、人を思いやる温かい気持ちに触れたことは、これから教師を目指して進んでいく私の励みとなりました。

一方、実習中に残念に思うこともありましたが、カフェでの食器の投げ散らかしや、テーブルや床が汚れたままであった



り、乱暴に扱われて壊れた備品を何度か目にしたことです。生活する環境である学校を、もう少し大切にしようという心を持って欲しいなと思いました。生徒であるときは、学園が尊重する「自由」が「あって当たり前」「守られて当然」と感じるかもしれません。でも、それは「5リスペクト」を中心として、生徒ひとりひとりが互いを思いやり、自由に伴うそれぞれの責任を自覚し、行動することによって支えられるものであることを忘れないでほしいと思います。

実習中は、英語科の先生の温かいサポートを始め、色々な先生方の励ましを頂き、とても充実した3週間を送ることが出来ました。実習中に、毎日熱心に教育に取り組まれている先生方の姿を間近で見て、千里国際学園では、生徒ひとりひとりを大切にされた個性を重視し、伸ばそうとする教育の実践に取り組まれていることを実感しました。また、スタッフや用務員の方々も、生徒の皆さんが安全で快適な学校生活が送れるように、さまざまな場面において熱心に働いておられることもわかりました。生徒との交流を中心とした実習中の学校生活を通し、実際に現場で学ぶことの大きな意味を感じました。この教育実習で得たものは大きく、教師を目指す私の一生の宝物になりました。本当にありがとうございました。

(★前ページの続き)

こることだと考えられます。ひとつの文化に属していないといけなく、ひとつの言語しかしゃべってはいけなく、というモノリンガルの尺度に押し込めるのではなく、バイリンガルは、言語においても

文化においても、より広い多彩な選択肢を持っているのだというように考えるべきでしょう。

参考文献:

東照二(2000)バイリンガリズム. 講談社現代新書

C. Baker & S.P. Jones (1998) Encyclopaedia of Bilingualism and Bilingual Education. Multilingual Matters.

Li Wei (2000) The Bilingualism Reader. Routledge

# 囲碁大阪府大会準優勝

## 「第2回文部科学大臣杯 小・中学校囲碁団体戦」

平尾公美洋

SIS教頭

三人の生徒が中学校囲碁大会に出場したいと教頭室を訪れたのは4月のことでした。聞けば、団体戦のため学校の承諾が必要とのこと。快く了承したのはもちろんですが、久しぶりに碁をやろうという生徒たちが現れたことに心が躍りました。

あまり知られていませんが、この学校にも囲碁部がありました。10年ぐらい前でしょうか、ルールの初歩しか知らない私が顧問になって発足しました。日本文化に根付き世界的広がりのある碁は、帰国生や外国の人が多い本校では特に興味深いのではないかと考えたのですが、残念ながら私も含めて指導できる教師や生徒がいなかったこともあり、冬眠状態になっていました。

碁は日本だけでなく国際的に受け入れられているゲームです。ラッセル・クローが主演した「ビューティフル・マインド」という天才数学者を主人公にしたアメリカ映画で、屋外で主人公が碁を打つ場面があります。映画を見ながら、アメリカの風景と東洋的な碁の組み合わせに不思議な感覚を持ったものです。碁には世界選手権もあり、日本・韓国・中国などの強い国だけでなく多くの国々にファンを抱えているようです。

また、「ヒカル碁」という漫画がヒットして以来、中高年から若い人へ、

イメージの変化も伺えます。実際、子どもと大人が碁盤を挟んで対戦していても、その光景だけではどちらが強いのかまったく判断ができません。しかも、一度身につければ生涯楽しめますので、若いうちに経験しておいて損はないと思います。

大阪府の大会には、石神宥馬君・看舎瑞穂さん・池田憲治君の三人が出場しました。三人のうちの一人は四段だと聞いて健闘しそうな予感がありました。三人の力が揃わなければ団体戦を制することは容易ではありません。三人が準優勝の賞状を持って現れたときには正直びっくりしました。ほんとうによくやったなあと思います。おめでとうございます。

8月に東京で開催される全国大会では強豪がひしめいていると思います。世の中には強い人がいるものだという経験と、碁を通じた友情が芽生えるといいですね。全国大会は独特の雰囲気にも包まれるでしょうが、気負うことなく楽しんできて下さい。健闘を祈っています。

なお、冬眠中の囲碁クラブは、池田君を部長に看舎さんを副部長に永い眠りから目覚めました。特に、指導面では数学の佐伯先生の力をお借りします。佐伯先生は控えめに四段とおっしゃいますが、もともと五段の力をお持ちで、初めての人にも丁寧に教えてください。クラブは毎週木曜日に和室で行っています



で、初心者の方でも気が向いたら訪れてください。碁の面白さと奥の深さを味わえるかもしれませんよ。

### 7-3 看舎瑞穂

4回戦の1回戦目は負けたので、「1勝できるかな？」と心配していましたが、その後3勝して、準優勝になりました。準優勝と発表された時、とっても驚きました。全国大会も3人で力を合わせてがんばりたいです！

### 7-3 池田憲治

碁大会の当日の時、いつもどおりの感じで碁を打っていた。別に打つだけの気持ちで大会に参加しただけで、全く緊張しなかった。けれど、4戦中3戦勝った。自分の心の中では、全国大会にいけるわけないだろう、と思えたけれど、準優勝してしまったので、びっくりした。決まった事は決まってしまったので、できる限りがんばろうと思った。

### 9-2 石神宥真

見ず知らずの人と、真剣に打つというのは初めてだったので、緊張していたが、思ったよりうまく打ててよかった。このような大会を経験して強くなりたい。

## もうすぐサマーキャンプ・ホームステイ

名称	行先	対象学年	日程	付添教員 *Director
森のキャンプ	彩都キャンプ場(茨木市)	7,8,9	2005/7/2-4	合志・志垣・福島・池田
フォレストレンジャー		10,11,12	2005/6/11-12,7/1,2-4	*田中(守)・平井・南
海洋キャンプ	YMCA阿南国際海洋センター(徳島県阿南市)	7,8,9	2005/7/2-5	*中尾・相良・野島・森(路)
マリンリーダー		10,11,12		
国際農業キャンプ	アジア学院(栃木県那須郡)	7-12	2005/7/3-6	*真砂・弥永
写真文芸帳作成キャンプ	別府(予定)	7-12	2005/7/4-8	*斎藤・木村・山本・伊藤
チャレンジキャンプ	日本アウトワードバウンドスクール(長野県北安曇郡小谷村)	9-12	2005/7/1-4	*新見・井藤・難波(和)
100キロウォーク	琵琶湖東岸から日本海	10,11,12	2005/7/1-4	*田中(憲)・馬場・高橋・岡本
心の旅	恵光院(和歌山県伊都郡高野町)	11,12	2005/7/4-7	*青山・松島
ホームステイ	オーストラリア ブリスベン	9	2005/7/8-30	*中村(亮)・水口・土佐

## Good-bye Message

**William Marocco**

*Music*

Coming to Japan to work at OIS/SIS in 1993 was a real adventure. After working with bands in Texas for twenty-eight years we looked forward to something different and that is what we realized once we started work here. We never dreamed we would be here for 12 years thinking perhaps two to three years at the most. But as the music program improved it became increasingly apparent that this would be a good place to stay. During this time in Japan we have made many friends and certainly widened our scope. We now know, not only many people here in Japan but also many friends all over the world. The two sons that we brought with us, Andrew and Daniel consider Japan home. They love Japan! We will be sad to leave Japan but will have many fond memories. We have a home in Texas, so that is where we plan to go. Please feel free to contact us if you will be coming to the Dallas/Fort Worth area. We would love to show you around. Our best wishes go all of the students, parents, and faculty of the OIS/SIS community.

**Mary Pfeiffer**

*English*

Some of you in the SIS community know this news already: At the end of spring trimester, I am leaving SIS to teach IB English and direct the Writing Center at Escola Graduada de Sao Paulo (The Graded School), an international school in Sao Paulo, Brazil. Although living in different countries and teaching in different international schools is the life I have chosen, a good-bye is still difficult. SIS has been my home for eight wonderful years, a significant chunk of my life. Teaching here with such nice students and terrific colleagues has made me a better teacher and person. I will always recall my time here with gratitude and fondness.

I am certain I will deeply miss SIS and Osaka because when my husband Josh Berg (OIS English teacher) and I left Osaka in 1997 and moved to Kenya, I thought

about this school and Japan nearly every day. We loved East Africa, but we reminisced so much about our lives and friends here, that three years later, we gladly returned. Last March, when my homeroom students graduated, they asked me, "Will you ever return to Japan?" Yes, I definitely will return to visit. Japan is part of my heart, part of who I am.

When you come back to school in August I will have already begun a new job and a new language (Portuguese!), in a new metropolis. Lots will change for me, but my respect and love for SIS will not change. Thank you, all of you, for eight memorable years.

If you ever want to say hello, I would love to hear how you are doing. Please email me in Brazil (mpfeiffer@graded.br).

**Suzan Hunter**

*Art*

I would like to take this opportunity to say good-bye to both the students and parents of SIS. After five great years at OIS/SIS, I am leaving to go back to Canada to study at UBC in Vancouver. While I am excited about my future plans to study, the transition won't be easy. I know how much I am going to miss coming to OIS/SIS everyday and working with such great kids. Throughout my time at the school, I have repeatedly heard how wonderful the students are- I know this to be true and want to thank you for making my job so enjoyable.

I would like to be able to say goodbye to all of you personally but I know that it just isn't possible. Instead, I will wish each of you all the best for the future in whatever you do.

Thank you all,

To look is one thing,

To see what you look at is another,

To understand what you see is a third,

To learn from what you understand is still something else:

To act on what you learn is all that matters.

-Taoist saying

**Sherryl Mannerheim**

*Art*

Having taught overseas for ten years and in Japan for three, it is with much regret that I have made the decision to return to my homeland, Melbourne, Australia. My reasons are three-fold. Firstly my eighty-three year old mother is in need of care; my son's requirements for educational immersion into his country of origin and lastly I am to marry my long time sweetheart Mark Walters in the early Southern hemisphere summer.

I want to express to SIS students who have been within my care and tutelage that you are wonderfully diligent and enthusiastic, polite and hard working young people! You have all been dear to my heart and I will miss you very very much. I will however, take with me some precious memories and special moments, accompanied by thousands of photographs. Where else the world-over, could I ever find such lovely students? Japan has impacted upon my life both culturally and educationally and the culinary delights I will also miss. As well as working with students in Art it was also indeed a pleasure to work alongside Mrs Osako and the students in the All School Productions. I would also like to thank Mr. Osako for allowing me to be a guest in his country and I will be forever grateful for my Japanese experience at Senri Kokusai Gakuen.

If you would like to write to me or if you are in Australia, please come and visit me. For my contact details, please come to the Art room. I would love to see you again.

My message to you:

Remember that if you have a goal, remain very focussed on that goal; for that is the way you will achieve it.

So, work hard, play hard and always reach for the stars!

Sayonara! God Bless!

# 学年だより

中等部 1年生 (7年生)

7年生5月のようす

井藤真由美

2組担任、英語科

<ただ今記事を書いているのは、5月の半ば過ぎ。初めての学園祭がもうすぐ!という時期です。>

入学式から一ヶ月あまり。7年生の生徒たちは、毎日楽しいことが盛りだくさんで学校に来るのが楽しくて仕方ない様子です。私も毎朝のみんなの元気な笑顔や、一日のできごとを報告してくれるノートが楽しみな日々です。

初めての学園祭に向けて各クラスとも着々と準備が進み、盛り上がっています。一組はゲーム。「ウルトラマン倒しとスーパーボールすくい」をしますが、全体を3班に分けて話し合いをしてもらい、その話し合いの結果を各班の代表者に発表してもらっています。みんなそれぞれ少人数だと意見が言いやすいみたいで、クラス全体が盛り上がっています。みんなが協力的な雰囲気、見ていて微笑ましいです。(高橋先生)

2組もゲーム。まとあてのボード作り、景品購入、看板作り、まとあてに使うお手玉作り、服装係・・・とグループに分かれ、各自自分の得意なことをクラスのために活かしてくれています。担任や役員が分担を決めなくても、自然とバランスのよいグループ編成が出来上がっているところに頼もしさを感じます。

3組は「本業ディスクに副業ゲーム。ピーズアクセサリーも売っていて、ボディペインティングもやります」という多角経営。準備が大変ですが、ディスクでは1時間ごとのショータイム、ゲーム屋さん、3種類のゲームを考えています。準備は7グループに分かれて、話し合いながら進めていますが、何か困ったことがあれば、クラスのみならずびっくりするほどいろんな意見が出てきて、解決できています。(合志先生)

どのクラスでも、それぞれが自分の考えをはっきり言うことができ、自分の仕事を自分で見つけて、積極的に取り組んでいます。「初めての学園祭を成功させたい」という気持ちで盛り上がっている真っ最中。このインターカルチャが発

行されるころには『大満足な良い思い出』として語れるとよいと思います。

さて、楽しい毎日を通しながら、小学校のときとは違うバラエティーに富んだ授業を楽しみ、そこでの課題をがんばっている7年生たちですが、5月にはいって、注意を受けたり叱られたりすることも少し出てきています。今のところ聞いているのは、宿題の取り組み方、おしゃべり、廊下で歩きながらの読書(危ない!)、言葉遣い、などです。授業や勉強への取り組みがきちりでき、5つのリスペクトにそったマナーのよい行動ができるというベースがあつてこそ、ここで与えられる自由や未知の可能性をより一層楽しめるというもので、この時期の基礎固めは大切。もし注意を受けることがあるとしたら、それは先生たちの愛情のこもったメッセージです。その言葉をしっかりと身に染み込ませて、自分で判断できるSIS生へと成長してほしいと思います。

私は、去年は12年生の担任をしたので、SISの卒業生として一年生である彼らから近況報告メールをよくもらいます。新しい世界で楽しんでいる、というのと同じくらいよく聞くのは「SISシック」の内容で、自分たちでは当たり前であった、5リスペクトに基づいた基本的な行動ができない大学生が多いことにショックを受けている人が少なからずいます。高校を出て突然与えられた自由に浮かっている人たちをクールに見ているSIS卒業生たちです。こういう卒業一年生からの報告を聞きつつ、学校に来てSIS一年生である7年生がエネルギーに日々SIS生徒として成長していく姿を見るのは、冒頭にも書いたようにとても楽しみなことです。と同時に、だからこそ、ほうっておけないことも出てきます。というわけで、先生が叱るとき、そこにはそれなりの深い愛情がこもっていることをお忘れなく。

中等部 2年生 (8年生)

Mark Avery

1組担任、英語科

Dear Parents,

The following is a summary of what I discussed at the last Parent's Friendship meeting that was held on May 12th.

This article was submitted prior to the

school festival.

保護者の方々へ、

下に書いてあるのは5月12日の親睦会のときに話したことのまとめになります。学園祭の前に提出しました。

1. Interviews・面談

8-1 Student interviews in May and June; Parent interviews will be held in December  
8-2 Student and Parent interviews in May and June

8-3 Student interviews in May and June; Parent interviews will be held in fall trimester

This is the official schedule for interviews. However, please feel free to contact your child's homeroom teacher or class teachers any time you have something you would like to discuss.

2. Homework・宿題

Students had been saying that they have a lot of homework and so I looked into this by asking the headmaster, the principal and the counsellor what they regarded to be a reasonable amount of homework for a grade eight student. All agreed that one to one and a half hours per night and about four hours on the weekend is a reasonable expectation. You may have noticed your child struggling at times to get things done. If this is the case, it would be advisable to talk about planning in advance so that assignments do not pile up. We advise students to do homework every day. They should start by going over what they learned that day and then preparing for the next day's lessons. Going to bed with all the homework done will give students a psychological advantage over students who go to bed wishing they had got it done. I also spoke to subject teachers at a recent meeting and asked that they inform the students of assignment and tests dates as early as possible to facilitate more effective organization.

3. New School Festival Guidelines・学園祭の新しいガイドライン

All three homeroom teachers are very proud of the work the students are doing to get ready for the school festival. Each class has very responsible people in all leadership positions and they are working eagerly and very independently to ensure

the school festival will be a success. We hope that all the students will feel the benefits and rewards of their hard work. In the interest of student safety and a better school festival, certain changes were made this year by a specially formed committee. The biggest affect on eighth graders was that they were not able to attend the evening performances. While the students were very disappointed, we must respect the decisions made by the committee, and remember that the students will be able to attend in grades nine, ten, eleven and twelve.

#### 4. New Middle School Student Council・新中等部生徒会

It is our turn to take the positions of responsibility in the middle school student council. The homeroom teachers have been very happy with the enthusiasm already being displayed and want to wish all the candidates the best of luck in the elections. The student council is the best chance the students have to prove that they can organize worthwhile and enjoyable activities. The school tours and welcome games the students organized for the new grade sevens in April fostered a strong bond between the two year levels and we are looking forward to a lot of good results from the new student council.

#### 5. Campaigns・キャンペーン

For four weeks, grade eight has had a weekly campaign targeting one aspect of a student's life. Here is a summary of what we focused on.

Week 1 - Punctuality・時間を守りましょう: getting to school on time, going to class on time and generally being aware of time during the day.

Week 2 - Being friendly and polite・挨拶・敬語: using polite language when we talk to teachers and classmates, greeting each other in the morning, saying good morning, thank you and goodbye in lessons. It is important that students can readily use language that is appropriate for a particular situation.

Week 3 - Lockers and Files・ロッカーやファイル: Keeping our lockers clean and organized, keeping all our notes in carefully arranged files. This will make it easier for the students to find things during the day and

keep a track of the things they need to do.

Week 4 - Daily Organization and Ways to Remember・自己管理: most students are able to remember daily things such as bringing forms back and putting their PE clothes in their bag, but not everyone. In this week, we will spend time talking about ways to stay on top of everything.

#### 6. To the students・生徒達へ

この学年はとて素晴らしい雰囲気になっています。残念なこともたまにあるのですが、全体的にはうまくいっている様子です。あなたたちはお互いのことを尊敬していて、意見をちゃんと聞いて、フレンドリーな人間関係を作ろうとしていますと思います。これが続いていけば、8年という一年はとて良い一年になるはずで、自分の学校も自分の学年も自分のことも、自慢できるよう態度で学校生活を楽しみましょう。

中等部3年生(9年生)

#### 学園祭に向けて

岡本茉莉

2組担任、国語科

(この原稿は学園祭前に書かれたものです)

新学年がスタートしてから、早くも二ヶ月がたちました。それぞれが自分の新しい学年、クラス、スケジュールにも慣れてきた頃かなと思います。また慣れてくると同時に、そろそろ少し疲れが出てきた頃かもしれません。

しかし! 疲れている暇はありません。5月28日には、学園祭が控えているのです。今年、9年生は1組がキックボドレースを、2組がバルーンアートを、そして3組は劇をすることになっていきます。今はちょうど各クラスとも準備の真っ只中。それぞれのクラスが練習や道具作り等に励んでいます。私も、生徒たちが自分たちのアイデアを出し合ったり、リーダーシップを発揮したり、積極的に準備に取り組んでいるのを、嬉しく、また頼もしい気持ちで見えています。勿論、時にはうまくいかないこともあるでしょう。友達と意見が衝突したりすることもあるかもしれません。しかしそれは一生懸命にやっているからこそぶつかる壁なのです。行き詰まりを感じることもあっても、その一つ一つが自分たちの力になっていくことを忘れずに、精一杯納得のいく学園祭を作り上げてほしいと

思います。

また、9年生にとってはこれが「中学校生活最後」の学園祭です。勿論これは学園祭だけでなく、これから始まる全ての行事等にも言えることです。千里国際学園は中学と高校がつながっているため、どうしてもそういったことを意識するのは難しいかもしれません。しかし、何年後に「あの時もとこうしておけばよかったなあ」という後悔だけはなくて済むように、中学生としての最後の一年を思い切り楽しみましょう。今という時間がどれだけ特別であるかを常に意識して、毎日を大切に過ごしてほしいと思います。

高等部1年生(10年生)

#### 「心のレンズ」を磨きましよう

見島直子

2組担任、国語科

私たちは周囲の環境に慣れてしまうと、注意して見るということをやめてしまいます。実際に「目で見る」という意味においてもそうですし、「心の目」という意味でも同じことが言えると思います。ですから、あれもこれもよく知っているような気になって、あれもこれも当たり前のようになってきたとき、私は心のレンズをきゅきゅっと磨くことにしています。きゅきゅっと磨くと言っても相手は心のレンズですから、あくまで心の持ちようのことですけれどもね。昔の人は、それを「初心忘るべからず」と言いました。

中等部から進学してきた生徒たちは、高校生になったとは言え同じ顔ぶれがざらりと並ぶ環境にいるわけですから、あまり新鮮味がないかもしれません。2組の生徒たちには、入学式の日の朝、「4月からの新入生だけでなく、このクラス全員が今日初めて顔を合わせた」と想像して自己紹介しましょう」と提案をしました。「えー、変なのー」というわけで、みな「よろしくおねがいします」なんて挨拶になってしまいました。不自然な設定だったかもしれませんが、心の持ちようとしては大事なことで私は思ったのです。あれから2ヶ月がたった今、4月からの新入生もそろそろ初めの新鮮さが薄れて、いろんなことが当たり前になってくる頃かもしれません。心のレンズを時には磨いてあげましよう。

「友情」に、このことを応用してみたいと思います。

「気心が知れる」という言葉は、友人関係を表すひとつの表現だと思いますが、この状態に大いに甘えてしまうと、思わぬ落とし穴に落ちることもあるのではないのでしょうか。「僕はアイツの考えることは手に取るようにわかる」とか「私のことは彼女が一番よくわかってくれる」と思える関係を手に入れることができたなら、それは幸運なことです。しかしその関係の中にも、相手を常に新鮮な目で見ようとする態度が大切です。高校時代は友情を培う上で絶好の時期です。16歳、17歳、18歳・・・子どもでもない大人でもないこの時代に得た友情は、長く続くこと、長く心に残ることが多いのです。ですから、皆さんにはぜひ、心のレンズを磨くことで、お互いの変化や成長に応じて、変化成長していく友情を築いて欲しいと願います。

そして「友情」は、実は同年代の間でのみ成立するものではありません。書物の中に友人を見つけることも出来ます。また生徒と教師の間の友情というのも可能だと思います。もちろん、書物の中の登場人物は、共に時間を過ごし話しあえる「友達」ではないでしょう。教師もあなたの「友達」ではありません。しかし、私は自分が正しいと信じることを生徒に伝えようとする時に、時として教師として指導するという気持ちよりも、友情に近い気持ちで話すことがあります。あなた方生徒の側からも、教員に対して、一人の人間として話したいと思ったり、影響を受けたりすることがあるとすれば、それは限りなく友情に近い、あるいは友情に発展する可能性のある関わり方だと思うのです。お互いを一人の独立した人格として認め、相手と誠実に向き合うときに友情が生まれるのであって、それはむしろ多くの場合、身近にいる同年代の友達との間に生まれるものですが、そうでない形のさまざまな「友情」もあなたたちは見つけることが出来るのです。見方によって人生はいかようにも面白くなっていきますね。

高等部2年生(11年生)  
個人と集団が共に良い成長を  
水口 香  
3組担任、英語科

新学年になりあっという間に2ヶ月が経ちました。徐々に高等部の担任になり、新たな発見の毎日を送っています。さすがに11年生ともなると、自分と集団に対する意識の持ち方が発展的で、人間的なバランスがとれ、人を思いやる余裕があり、また判断力・行動力ともない、感心させられることがたくさんあります。特に各委員(クラス代表・図書委員、ロングホームルーム委員、学年旅行委員、学園祭の各係)の企画・運営能力の高さとクラス全体の協力的な姿勢、学園祭での自発的な行動には感動を覚えました。クラスの考えをうまくまとめることが上手な人、創造性と技術に優れ豊かさを与えてくれる人、細かい仕事が得意な人、現場をしきるのがうまい人等、いろいろな特性をもった人たちが密接に関係して、個人が集団を支え、また集団が個人を育てているのが手に取るように感じられます。今後も互いに尊重しあい、共にすばらしい成長を遂げていってくださることを心から願っています。

高等部3年生(12年生)  
一人一人が凄いい力を持っている  
志垣満理

3組担任、生活科学科

12年生にとっては、最後の学園祭が終わりました。今年も、昨年同様、各クラスでそれぞれの出し物はするけど、学年として何か統一したものをしたいということで、学年のテーマを“万博”と決めて準備が始まりました。出し物がすべて食べ物ということで、いつもの学園祭かなと思いきや、学年で、パフォーマンスをするということも決まり、出演を希望するグループが少なかったということで、各クラスごとに何かしなくてはいけないということになってしまいました。クラスの(あまり活発とはいえない、、、)話し合いでは、とにかく3組は、ダンスをすることに決まり出し物がマツケンサンバに決まったのが10日前。どうなるんだろうと見ていましたが、いつもながら見事なラストパートを見せてくれました。最後の1週間は、クラスデコ(レーション)、学年デコ、クラスのポスター、マツケンの小道具作り、クラス全員分のエプロン作りとそれぞれが、自分のできる限りの時間と力を使って学園祭を作り上げるために関ってくれ

ました。そして、すばらしかったのは、それがすべて誰かに言われるのではなく、自発的に皆が力を尽くしてくれたことです。見ていて、実に気持ちの良い生徒たちの姿でした。そして当日、ひたすら生活科学室でピザを作っていた人、売り上げに貢献した人、それぞれがまた、最後の力を出し切っていました。マツケンサンバもあそこまで団結してみんなで盛り上げられるとは思いませんでしたが、みんなとてもいい顔をしていましたね。踊りに参加しなかった人も、小道具を作ったり、皆が踊っている間に、ピザの番をしてくれたり、今回のマツケンは本当にクラス全員の力で作り上げたものです。最後の学園祭でクラスがひとつになってここまで力を出せたことが、本当に良かったと思います。生徒の皆も、きっと「自分たちってスゴイ！」って思ったのではないのでしょうか。もし、そう思っていない人がいたら、「本当に、みんな一人一人が凄いい力を持っているんだよ」と伝えたいと思います。これだけ、すばらしい学園祭を作り上げてくれた、みんなにありがとう。きっとこの姿は、みんなが卒業しても、下級生たちの中に残っていくことでしょう。

これから、本格的に受験に向けた日々が始まりますが、今回見せてくれた集中力があればきっと大丈夫。悔いの無いように思いっきり、自分の進路に向かって、努力を続け、進んでいってください。

### 千里国際学園基本方針

千里国際学園では、自分の行動に責任を持ち、よい人間関係を維持していく能力が、生徒各自に備わっていると信じます。この考えのもとついで、次のような行動の目安がつけられています。

#### <5つのリスペクト>

自分を大切にする  
他の人を大切にする  
学習を大切にする  
環境を大切にする  
リーダーシップを大切にする

# 図書館より

## <夏休みの長期貸出>

6月16日以降は、SISの生徒の返却期限が9月1日になります。OIS生徒は特別許可があれば借りられますが通常は貸出していませんので、授業の都合などで借りる必要がある場合は申し出てもらっています。

貸出冊数は、通常は日英各6冊ずつですが、もっと借りたい人はスタッフに断ってもらえば何冊でも借りられます。ただし、ちゃんと期限内に学校に持ってこられる冊数を考えて下さいね。

長い夏休みの計画は決まっていますか？ 普段なかなか読めない長編小説などの読破も、是非そこに加えてください！

## <夏の開館予定>

- 6/29 (水) 通常開館

6/30 (木) 8:00-12:00am開館

7/1 - 7/20 閉館

7/25-8/19 J F Kのための開館 週1日のみ(日程未定)

8/20 - 25 閉館

8/26 (金) - 30 (火) 9:00am - 4:00pm

新学期準備

8/31(水) - 通常開館 授業開始

詳しくは図書館入口に掲示しますので、見て下さい。

## <行方不明の日本語図書リスト>

昨年度もまた蔵書点検の結果、行方不明の図書が判明しました。今回はなんと32冊です。この数字は、過去14年間で最多で、昨年度は10冊、02年度5冊、01年度3冊、00年度0冊、通常は多くても15冊程度だったことを考えると、大変異例のことです。点検の際のミスがあるかと思い、4、5月と探していましたが、やはり見つからないので、公開することにしました。どうぞ皆さん、学内のどこかに放置されていないか、気にしてみてください。なお、逆に以前不明になり見つかった本も4冊ありました。教室を大掃除したら出てくる事がよくあり、学級文庫や教科教室の図書の中に紛れていることもあります。

行方不明の本のタイトルをみると、いくつかのテーマについての本が固

まってなくなっているのがわかります。買ってすぐに無くなってしまったものもあります。実際にやった人は1人2人でしょうが、手続きが面倒でそのまま持ち出して、レポートなどで使い終わってもそのまま忘れて放りっ放しというのでは、余りに他の人や環境への延いては自分自身へのリスペクトがなさ過ぎます。

図書館としては、本が無くなるからといって、皆さんが自分の荷物を持ち込むのを制限するなど、不便になる処置はしたくありません。まずは、一人一人の自覚を促したいと思います。いいかげんに扱う人が少なければ、全体の雰囲気が変わり、皆が自主的にきちんと使う図書館を維持していけるはずですよ。

最近、雑誌の棚の中に本が隠してあったり、読んだ雑誌や本を座席に置きっぱなし、コンピュータの席や2FMMラボの中に置き去りにする人も出てきています。本棚がだいが埋まってきていて元の場所に入れにくかったり、スタッフがきちんと点検整頓する時間足りなかったりするので、お互いに気持ちよく使うためには、ますます皆さんの協力が不可欠です。

紛失図書というのは、誰かがなくして弁償している図書です。昨年度も多くて11件もありました。学内のどこかに置き去りにされている可能性も高いです。図書館としては弁償してもらよりも、本が戻ってくるのが一番うれしい。一人一人、借りた本に対するちょっとした気配りを心がけてほしいです。

## <行方不明の日本語図書リスト>

2004年度不明分 32冊 ¥50,282

- 167.3:77E:1 コーラン 1 (中公クラシックスE6) 中央公論新社 ¥1,350  
 167.3:77E:2 コーラン 2 (中公クラシックスE7) 中央公論新社 ¥1,400  
 209:441:1世界の歴史 1 中央公論社 ¥2,524  
 210.35:777 奈良 吉川弘文館 ¥1,800  
 242.03:73大英博物館古代エジプト百科事典 原書房 ¥9,500  
 472.1:771:1 野の植物誌 (山溪カラー名鑑) 山と溪谷社 ¥3,500  
 491.35:777 顔よりからだ。(主婦と生活シリーズ133) 主婦と生活社 ¥1,300  
 491.371:777 脳健康 (ブルーバックスB-1360) 講談社 ¥960  
 508:777:517 ファイン・セラミックス (ブルーバックス) 講談社 ¥500  
 518.52:777 新・今「ゴミ」が危ない(新・「驚異の科学」シリーズ3) 学習研究社 ¥1,300  
 518.52:777 ごみ問題百科 新日本出版社 ¥1,700  
 518.52:777 ゴミって何? 技術と人間 ¥1,800  
 519.08:777:1 ゴミつきあおう(わたしたちの生きてい

- る地球 調べ学習にやくだつ環境の本1) 童心社 ¥2,800  
 523.06:777 絵で見る近代建築とデザインの歩み 鹿島出版社 ¥2,600  
 911.56:777 高村光太郎詩集 (岩波文庫) 岩波書店 ¥250  
 913.6:777 性的人間 (新潮文庫) 新潮社 ¥400  
 913.6:777 加八海の火祭 毎日新聞社 ¥1,500  
 913.6:777 加八雪国 (新潮文庫) 新潮社 ¥324  
 913.6:777 青いりんごのふるさと (集団読書テキスト) 全国学校図書館協議会 ¥144  
 913.6:777 久保人間失格、グッド・バイ (岩波文庫) 岩波書店 ¥250  
 913.6:777 三三四郎 (岩波文庫) 岩波書店 ¥310  
 913.6:777 S & G グレイテスト・ヒッツ+1 (ちくま文庫) 筑摩書房 ¥690  
 913.6:777 塩狩峠 新潮社 ¥1,300  
 916.4:777 広島第二県女二年西組 (ちくま文庫) 筑摩書房 ¥450  
 918.6:777 14 高見順 (新潮現代文学14) 新潮社 ¥1,200  
 933:777 アンクル・トムの小屋 (世界文学の玉手箱11) 河出書房新社 ¥1,000  
 933:777 7さいごの戦い (岩波少年文庫) 岩波書店 ¥550  
 983:777 1罪と罰 上巻 (新潮文庫) 新潮社 ¥590  
 983:777 2罪と罰 下巻 (新潮文庫) 新潮社 ¥590  
 984:777 人生論 (ワイド版岩波文庫) 岩波書店 ¥900  
 R813.5:777 角川類語新辞典 角川書店 ¥4,400  
 RP813.7:777 94/2 テレビ年表 1950~1993 (現代用語の基礎知識 別冊付録1994年版) ¥2,500  
 2004年度紛失分 11冊 ¥13,132  
 140.4:777:5 しあわせ (あなたへ) 岩崎書店 ¥896  
 145.8:777 分析・多重人格のすべて リヨン社 ¥1,456  
 213.6:777 東京の歴史 (岩波ジュニア新書) 岩波書店 ¥650  
 323.14:777 戦争はなくせないの? (今、考えよう! 日本国憲法5) あかね書房 ¥3,000  
 407:777 2ガリレオ工房の身近な道具で大実験 第2集 大月書店 ¥1,300  
 519.8:777 海はなぜよごれてしまうのか? (やさしい図解・地球があぶない5) 偕成社 ¥3,000  
 814.7:777 付加平成新語×流行語小辞典 (現代新書) 講談社 ¥720  
 818:777 方言の原っぱ 草土文化 ¥980  
 913.6:777 思い出さないうらな (新潮文庫) 新潮社 ¥320  
 913.6:777 限りなく透明に近いブルー (講談社文庫) 講談社 ¥260  
 E933:777 モルグ街の怪事件 (フォア文庫B148) 岩崎書店 ¥550  
 2003年度不明分 7冊 ¥11,819 (不明分10冊中3冊発見しました)  
 493.7:777 加八精神病 (岩波新書 新赤版581) 岩波書店 ¥640  
 558.7:777 加八海にねむる資源・海洋深層水 ¥1,400  
 913.6:777 加八ころ (新潮文庫な-1-13) 新潮社 ¥324  
 916:777 生まれたのは何のために 教文館 ¥2,575  
 R389.033:777 世界シンボル辞典 三省堂 ¥4,800  
 E913.6:777 加八 こぎつねコンチ (こどもとお母さんのおはなし) のら書店 ¥1,100  
 E913.6:777 あしたぶたの日ぶたじかん (あたらしい創作童話) 岩崎書店 ¥980  
 2003年度紛失分 9冊 ¥8,450 (不明分10冊中1冊発見しました)  
 1 ケルト神話と中世騎士物語 (中公新書1254) 中央公論新社 ¥740  
 410.38:777 数学公式に強くなる (岩波ジュニア新書) 岩波書店 ¥670  
 675.08:777 20 いらっしやいませスーパーへ (社会科はこぼれてくるしくみシリーズ20) PHP研究所 ¥2100  
 830.7:777 インターネット英語入門 (岩波ジュニア新書354) 岩波書店 ¥700  
 913.6:777 ガンバとカワウソの冒険 (岩波少年文庫) 岩波書店 ¥800  
 913.6:777 斜陽 (新潮文庫) 新潮社 ¥200  
 916:777 生きています、15歳。 ポプラ社 ¥1,200  
 E388.8:777 顔のことわざ探偵団 (フォア文庫B204) 童心社 ¥540  
 E933:777 ミイラ男 (モンスター図鑑) ほるぷ出版 ¥1,500

# 9月より授業時間帯が変わります

真砂和典

教務センター、理科

本学園ではカフェテリアの混雑を避けるために、4時間目または5時間目をランチタイムに当ててきました。しかし、4時間目と5時間目に連続で授業を選択したいという(熱心な!!)生徒が少なからず存在しています。彼らのランチタイムを確保することを含めて、今回の変更により次のような利点を考えています。

1. ランチの時間が確保されるので取りたい授業がより取りやすくなります。ブロック と の両方に取りたい授業があるときでも、取ることができます。
2. 一学期に選択できる授業が増え、各生徒の需要を満たします。例えば、センター試験の科目増に対応しやすくなります。
3. 中等部の昼休みにゆとりができます。中等部では着替えや片付けの必要な体育や音楽の授業が昼にあるので、これまでには昼休みが短くなったり、3時間目や6時間目に影響がでたりすることがありました。
4. ランチの時間が確保されている場合、ブロック や の実験・実習科目は、55分に20分を加えて75分の授業が可能になります。
5. 20分のブレイクを使って希望者が参加できるような企画を立てられます。例えば、プレゼンテーションを授業から取り出して全校に公開する場とすることができます。

「昼休み=ランチ+休憩」という一般的な考え方を変えると、授業のない時間=Unscheduled time(通称アンスケ)を調

これまでの時間帯		新しい時間帯	
8:30- 8:45	SHR	8:30- 8:45	SHR
8:45- 9:45	1	8:45- 9:40	1
9:45-10:45	2	9:40-10:35	2
10:45-11:45	3	10:35-11:30	3
11:45-12:40	4(Lunch)	11:30-12:25	4(Lunch)
		12:25-12:45	Break
12:40-13:35	5(Lunch)	12:45-13:40	5(Lunch)
13:35-14:35	6	13:40-14:35	6
14:35-15:30	7	14:35-15:30	7
15:30-15:40	7-8年SHR	15:30-15:40	7-8年SHR

節することによって、ランチ、休憩、そして自習時間を、自分でうまく組み立てることができます。それによって授業選択の可能性が広がります。

## 夏休みの準備

弥永千穂

保健室

もうすぐ夏休みですね。健康診断の結果はいかがでしたか?視力検査結果のお手紙をもらった人は必ずメガネやコンタクトレンズを夏休み中に準備しましょう。自分では「見えている」と思って検査に行かない人もいます。さすがに「見えていないのに慣れてしまっています。本当に「見える」ときとびっくりすると思いますよ。もう一度詳しく視力を測りたい人はいつでも保健室にどうぞ。そして体重。健康診断の結果をみていると身長があまり伸びていないのに体重がぐぐっと増えている人やちょっと体重の足りないおやせさんが気になりました。標準体重は「身長(m)×身長(m)×22」kgを目安にしてください。まずは体重だけが増えている人は食生活を見直しましょう。間食は?食事の時間は?量は?朝昼晩にきちんと食べて、腹8分目がひとつの目安です。食事を抜いたり、食べ物を制限する

ようなダイエットは必要ありません。それなら体を動かしましょう!逆にちょっと体重が少なめな人は3食十分な量を食べていますか?食事は自分の体を作るために必要なものです。バランスのとれた食事から健康でバランスのとれた心と体が生まれます!

さて、ひとつ夏休みの過ごし方でも願いがあります。夏休みはお友達と遊ぶ時間も多くなり、また新しい人との出会いもあるでしょう。その中にはお酒やタバコ、性の誘惑が潜んでいるかもしれません。どうかその場の雰囲気やノリで自分を失わないように。安易な判断は薬物乱用、性病、望まない妊娠など悲しい結果を招きかねません。好奇心に負けず、きちんと断るところは断ること。しっかりと自分をもって良い思い出となるような夏を過ごしてください。みなさんが笑顔で9月に戻ってくるのを楽しみにしています!

## <スポーツ> シーズンを終えて

### ◆HSソフトボール

～青春物語～

田辺明日香

高等部3年

「メンバー集めなソフトのAPACなくなるから皆お願いやからソフト部入ってや〜〜」という勧誘から今年のソフトは始まりました。去年ソフトをしていたメンバーを中心に懸命に呼び込みをしたおかげでSIGN-UPの日までに規定人数を集めることが出来ました。毎年ソフトの時期はサッカーと同じなので人集めが難しく、今年に限っては人数が集まらなないとAPACはもちろんソフトのシーズン自体がなくなってしまうと言われていたので皆必死でした。その為、平井コーチの口から「人数が集まったので上海で行われるAPACに参加します。」という言葉を感じた時は口から心臓が飛び出そうになるくらい嬉しかったです。そうして集まった20人+マネージャー。編入生や下の学年が多く(12年なので当たり前なのですが)初めは正直チームがまとまって行けるのか心配でした。半強制的?に人数を集めたせいか練習に全員が揃う事はめったになく、6人だけで練習した日もありました。そうして始まったソフト部、気づいたときにはもう最終日を迎えています。一瞬にして過ぎ去った時と引き換えに仲間達と過ごした沢山の青春の思い出を得ることが出来ました。私はソフトに入って3年目なのですが、ここで今に至る3年を振り返ってみたいと思います。一年目、同級生4人と共にソフト部に入りました。SARSの為、結果的には中止になってしまったAPACのメンバーと一緒に始めた同級生の中に私だけ入ることが出来ず、悔し泣きをしたあの日の事は今でも鮮明に覚えています。(そもそも10年でAPACメンバーに選ばれた友人の方が例外なのですが...)二年目、大量の12年生が抜けてしまい、新たなメンバーで頑張ったCA invitational APACで3位入賞を果たした年。Player of the Game, All APACを貰うこともでき、とても刺激的な年でした。そうして迎えた今年。キャプテンという重大な任務をまかされ、自分なりに悔いの残らない様にプレーした年。又、APACに行く、試合中にゲッツ

をするという夢を実現出来た年でもあります。後輩の子達とも良い?スキンシップを築く事ができ、今ではすっかり皆が大の仲良しになりました。いつの間にか皆「一年中ソフトをしたい!」と言うくらいソフト愛好者にもなりました。チーム全体が一致団結し、はしゃぐ時ははしゃぎ、やる時はやるというケジメをつける事も出来るようになりました。取り分け上手い訳でもなく、キャプテンらしくない頼りない私でしたが、温かく受け入れてくれ、チームのメンバーには本当に感謝しています。笑顔で私を支えてくれたチームメンバー、休みの日にわざわざ応援に来てくれた、友達、家族の方々。心の底から「ありがとう」を言いたいです。相良先生、中尾先生にも感謝、感謝です。そして最後に、時に(いつも?)厳しく、時には優しく、最後まで見捨てずにソフトの素晴らしさを教えてくれた平井コーチ。コーチのお陰で私はこの3年間で肉体的にも精神的にも鍛えられました。最後の方にしましては、しごかれている時に嬉しさを感じるまでに成長する事が出来ました。本当にありがとうございました。...とソフトの事を語りだすと止まらなくなるのでこの辺で終わりにしますが、この記事を読んで少しでもソフトに興味がわいたそこのアナタ!是非、来年ソフト部へ入りましょう~

いい思い出になりました

角畑沙菜

高等部3年

ソフトのシーズンが始まる前に、20人集めないとAPACに行けない、という話を聞いて私たち12年は最後という事もあって、必死の思いで20人集めました。そして、なんとか20人集まり無事にシーズンを迎える事が出来ました。メンバーの半分が12年という事もあり、私たちにとっては最後のソフトなので、気合は十分にありました。しかし、最初のCAとの練習試合では思っている以上にうまく出来ず、結果、負けに終わりました。こんな

ですが、逆にそれがAPACでは絶対に勝とうという思いにつながりました。そして、APACの前にあるトーナメントで、いつも敵対視していたマリストと試合する事も出来ました。やっぱりその時も負けではしまいましたが、APACへの大きな自信もつきました。今年のソフトのAPACは上海で行われる予定だったのですが、その頃上海は反日デモの真っ最中だったので、APACいけんの?という不安が皆のなかにもありました。一昨年も北京であるはずだったAPACもSARSでなくなっていたり、バレーのAPACも台風でなくなったりと、災難続きだったので、皆の神経はピリピリしていました。しかし、平井先生からAPACは予定通り行きますというのを聞いて、改めてAPACへの気合を取り直す事が出来ました。APAC当日、私たちにしてみればソフトでの海外遠征は初めてだったので、すごくワクワク、ドキドキしていました。現地に着いて、試合が始まる日になっても、皆ホストファミリーの話をして盛り上がり、のんびりしていました。しかし、実際に試合が始まるとさっきまでの気分は一変して、緊張感をもって試合に臨みました。私はそんな皆をみて、本当に優勝したい、と思いました。しかし、準決勝では負けてしまい、決勝に進む事は出来ませんでした。それでも最後の3位、4位決定戦では悔いのない試合が出来、結果、3位になる事が出来ました。日本に残っている他のメンバーに優勝トロフィーを持って帰ってあげる事は出来ませんでした。3位のトロフィー、そしてスポーツマンシップのトロフィーをお土産として持って帰る事が出来ました。ソフトはAPACが終わっても、マリストであるトーナメントが残っていました。皆APACですごく成長して、ライバルであるマリストに勝てる、という自信ができました。トーナメントの前にマリストと練習試合をしましたが、こっちのチームは何人かメンバーが欠けているといった状態での試合になりました。しかし、APACでの成果もあり、念願であったマリストに勝つ事が出来ました。これでより一層トーナメントへの自信ができました。絶対に優勝する、という思いでトーナメン

トを迎えました。初日目は1勝1敗といった結果でしたが、次の準決勝で勝てば、決勝という事でした。そして、準決勝の相手はマリストでした。前回の練習試合で勝った、という事もあったのでこっちは気合十分でした。しかし、むこうも同じ気持ちだったので、緊張感たっぷりの試合になりました。結果はマリストの圧勝に終わりました。しかし、悔いのない良い試合でした。APACでもトーナメントでも優勝する事は出来ませんが、このシーズンで皆すごく成長し、強くなりました。今年が最後という人がほとんどだったので、来年はすごく人数が減ってしまいますが、今年の経験をいかして、来年は絶対に勝ってほしいです。最後にこのメンバーでソフトが出来て本当に楽しかったし、いい思い出になりました。同じキャプテンとしてやってくれたあすかや、私たちをキャプテンとして受け入れてくれた他のメンバー、平井先生、中尾先生に感謝します。

## ◆MSソフトボール

初の決勝進出2位

中尾直子

コーチ・保健体育科



MSソフトボールチーム

予選	SOIS vs Marist	5-8
	SOIS vs CA	19-2
	SOIS vs NIS	15-14
決勝	SOIS vs Marist	2-4

名古屋の青空の下、MSのソフトボールトーナメントが行われました。結果は2度もマリストにやられ、2位でしたが、どちらも良い試合でした。予選最後の名古屋とのスリリングな試合の後、初の決勝進出が決まり、泣き出す選手も。当然、惜しくも負けた決勝戦後も涙でした。9年生はこの経験を生かし、HSでもがんばってください。8年生以下は、今年こそ優勝しましょう。引率してくださった岡本先生ありがとうございました。

## ◆卓球

女子シングルス・ダブルスと混合ダブルスで優勝

高橋寿弥

コーチ・数学科

2005年度の卓球の活動も5月21日(土)のトーナメントをもって終了しました。今年度は中学が男子9名・女子1名参加し、高校は男子9名・女子3名が参加しました。人数の割には、テーブルが3台しか設置できなかったため、みんなうまく譲り合って使えるかどうか心配していましたが、概ねみんな協力しながらできたと思います。中学からずっと毎年参加している高校生の生徒のうち、何名かは見違えるほど技術を伸ばしてきているのには、今年度も注目すべきものがありました。来年も更に充実した活動になれば良いと期待しています。

最後に、5月21日(土)に本校で行なわれた、関西トーナメントの結果を報告しておきます。

女子シングルス優勝 上田 瑠香 (SIS11)

女子ダブルス優勝 相山朋加・上田瑠香 (共にSIS11)

混合ダブルス優勝 洪知仙 (SIS10)・Istvan Viczian (OIS11)

## ◆野球

KIU主催トーナメント優勝

相良宗孝

コーチ・保健体育科

今シーズンから、高等部の野球は春シーズン、秋シーズンと2シーズンになりました。

5月20日、21日には春シーズン最後のKIU(京都国際大学)主催の招待トーナメントが行われました。マリスト、名古屋、KIU、本校と4つのチームでの小さな大会でしたが、選手は素晴らしいパフォーマンスを見せてくれました。

初日、名古屋とのオープニングゲームでは、お互い硬くなりミスがありましたが、最終回に集中打を浴びせて逆転勝ち。その後のKIUとのゲームでは相手の素晴らしいピッチャーに本校の打撃が沈黙し敗れまし

た。

2日目にはマリストを大差で破り、決勝ではKIUとのリベンジになりました。初日から、お互い、闘志むき出しに戦った試合は逆転につく逆転、規定の7回を4-4で終え、延長戦に進みました。それでも決着がつかず、結局、時間切れの両校優勝に終わりました。

選手の粘り、パフォーマンスは本当に素晴らしい感動的な試合でした。みんな、お疲れ様でした。秋シーズンもがんばりましょう。

## ◆タッチ

本校でトーナメント

相良宗孝

コーチ・保健体育科

あいにくの雨模様の中、5月22日(日)にタッチのトーナメントが本校で行われました。外部から4チームを招待してのトーナメントです。毎回ながら、タッチの試合の相手は必ず大人で、体力的にはとても苦しい戦いが続くのですが、わがセイバーズはすべての大人チームからトライをとるなど、素晴らしいパフォーマンスを見せました。

特に、今シーズン、キャプテンとしてチームを引っ張ってきた12年生の安積君はパフォーマンスもさることながら、素晴らしいキャプテンシーも発揮して有終の美を飾ってくれました。みんな本当にお疲れ様でした。

## ◆Badminton

the championship in 3 out of 5 categories

S.Datta

Coach, Social Studies

The Badminton tournament was held at Osaka on May 21st. First of all, we would like to congratulate the 12th grade players



バドミントンチーム

for their leadership and long dedication to the Badminton club. We were also impressed by the eagerness of all our players to help with the running of the tournament. We are truly proud of this spirit and sense of responsibility of the Sabers players.

This year, we played against some tough competition from CA, Nagoya and Kyoto in all the categories. We took the championship in 3 out of 5 categories, and second place in 2 categories.

**The results:**

Girls Singles Champion: Yaya Makino

Girls Doubles Champions: Yui Yanai & Mika Tokuyama

Mixed Doubles Champions: Gordon Miyamoto & Mika Tokuyama

Girls Doubles Second Place: Nozomi Minamide & Yaya Makino

Mixed Doubles Second Place: Ken Nishiguchi & Yui Yanai

I feel our boys and girls gave their best to the short season we had, and they are eager to improve in the years to come.

◆**トライアスロン・ランニング**

馬場博史

クラブ顧問、数学科

■**大阪府高等学校陸上競技大会(1地区インターハイ予選)**

5月3、4日に万博競技場で開催され、3名が参加し好記録を残しましたが、いずれも大阪府大会出場はなりませんでした。<記録> 1500m 小原一平(SIS12) 4'26"、真砂健士(SIS11) 5'01"、5000m 小原一平 17'24"、800m 小原大地(SIS11) 2'18"

■**吹田市トライアスロン連盟杯デュアスロン大会**

## Final Awards

Simon Parker

*Athletic Director*

Following students were decided upon to receive the major awards at the athletic banquet on Friday June 10th. This was an opportunity for all high school students and faculty involved in the athletic programme to come together and celebrate the events of the past year in sport. Each coach gave a short account of their season before awarding prizes to 2 members of the squad for Most Improved player and Most Valuable player. Then finally we presented this year's High School Athlete of the Year and Scholar Athlete of the Year awards. It was an excellent evening and a lot of fun.

### Outstanding Athlete

Girls': Ayaka Cooke, Boys': Kohei Kuroda

Dr. Fukuda Scholar Athlete Award

SIS: Hiroaki Azumi, Mari Kim, OIS: Evan Shore

5月15日(日)に吹田市総合運動場で開催され、本学園から13名が参加、うち11名が入賞しました。距離は中学生(Run2km, Bike10km, Run3km)、高校生以上(Run2km, Bike15km, Run5km)で争われました。中学女子1位津高穂絵(SIS9)、2位竹尾麻子、3位小縣郁(以上SIS7)。中学男子1位小澤悠、2位春名暢、3位亀井潤(以上SIS9)、4位鈴木景(SIS8)。一般男子1位花光照宗、2位古岡祐輝(以上SIS10)、3位Raymond Terhune(OIS9)、4位中島徳市(SIS10)。壮年男子1位馬場博史(教員)、3位小縣健(保護者)。

■**大阪中学校陸上競技大会豊能地区予選**

6月4日(土)に服部緑地陸上競技場で開催され、本校から7名が参加し好記録を残しましたが、いずれも大阪府大会出場はなりませんでした。<記録> 3000m 小澤悠 10'28" (SIS9)、1500m 春名暢 5'15" (SIS9)、800m 竹尾麻子 2'48"、林真希 2'56"、早川いお 3'03"、柴田美奈 3'09"、吉積悠 3'26" (以上SIS7)

■**APAC Cross Country 女子選手団募集**

11月上旬に APAC Cross Country がグアム島で開催されます。2日間、個人走と駅伝で争います。男子5名、女子5名が選手として参加できますが、クラブでは女子の人数が足りません。そこで、9-12

年生女子で、9-10月に週3回以上4:00-4:45の練習に確実に参加できる人を募集します。希望者は馬場まで。



5/15デュアスロン大会

★**APACとは**

Asia Pacific Activities Conference の略称で、次の学校が加盟しています。

<**APAC参加校**>

北京インターナショナル・スクール (ISB:中国)、上海アメリカン・スクール (SAS:中国)、ブレント・インターナショナル・スクール・マニラ (Brent:フィリピン)、ソウル・フォーリン・スクール (SFS:韓国)、カナディアン・アカデミー (CA:神戸)、千里国際学園 (SIS/OIS:大阪)

# 彩都によきによき成長中!! 彩都プロジェクト

青木光理

高等部3年

早くも色彩体温から1年、五感回帰から2年がたちました。そんな記念すべき日に私たちSISメンバーと大学生、IMIの方々、専門家の方々、また国文の方々など特異な組み合わせで会議をおこないました。またこの会議は今年のプロジェクトを成功に導く大きな一歩となりました。このようにさまざまな世代、環境にある方々と活動できるのが彩都のメリットですね。さすが出会い系彩都!!一人一人の彩都メンバーの成長とともに彩都プロジェクトもどんどん大きなプロジェクトへと成長しています。これほど大きなプロジェクトになると、いろんな人がそれぞれの立場で意見をいいあうのでまとめるのはすごく難しいのですが、みんながひとつのプロジェクトに向かって立場をこえて真剣に語り合ったことに驚きました。もちろん、すべて思い通りに物事が進むわけではなく、壁にぶちあたってはみんなで悩み、解決していくたびに一人一人の自信につながっている気がします。そんな困難な会議のすえ今年のイベントがようやく決定しました。今年は夏に「いきる」と「いのち」の二つのプロジェクトを同時進行でおこないます。いのちプロジェクトでは、里山にいる動

植物に子どもが触れる場を提供します。最近の子どもは、動植物に触れる機会が少なくなってきているため、感性が乏しくなってきているようです。そこで、このプロジェクトでは里山の植生を調査することから始めます。里山にどのような植物があるのか、どのような状態なのかを知ることで、植物の多様性や昆虫についての興味を喚起することができます。学んだことを踏まえて、いのちのプロジェクトでは2つのワークショップを行う予定です。一つは昆虫を採集して昆虫を身近に感じ、マップを作成することです。もう一つは里山にある食材を使った料理をすることです。また、いきるプロジェクトでは、参加者に山を知ってもらうと同時に、そこで生活できるよう、山を気遣った設備を一緒に作り上げていきます。参加者と作り上げる設備はおもに3つ。かまど、パイオトイレ、水がめです。これらのものを私たちとともに作って下さる方がたは、発明家藤村康之先生そして陶芸家の宮本ルミ子先生そしてキラキラ博士として有名な森脇裕之先生。藤村先生は、今までに1000を超える発明をなされ、現在は日本だけでなく海外の人々の暮らしを良くする为非電化製品を作っているらしいです。私達の活動にも賛同して下さり、いつも「楽しいこ

とをすればいいんだよー」と、私達を励まし、力になってくれています。宮本先生とともに、陶芸の野焼きの方法で、粘土で形作った水がめを約3日間かけて山で焼き上げます。これは宮本先生も初挑戦!みんなで新しいことにチャレンジです。そしてメディアアーティストである森脇先生は、光を使ったさまざまな作品を主に作られています。また、紅白歌合戦の小林幸子さんの衣装デザインも、森脇先生が手掛けた物だそうです。いろいろな立場からの意見を見事にきれいな言葉にまとめてくださる森脇先生に私たちはいつも助けられています。

今年の夏は、参加者にとって、そして彩都メンバーにとっても、山での生活の第一歩になるのです。これまでの道のりは長かったけど、これからは夏に向かって突っ走るのみです。彩都のことが気になっていたあなたも、山が大好きなあなたも、今年の夏は私たちと一緒に山で最高の思い出を作ってみませんか?興味のある人は火曜日または金曜日の放課後に地学室で行われているミーティングに顔をだしてもらおうか、近くの彩都メンバー(12年青木光理・11年井上裕子)に声をかけてください。

## 出場者募集! ご家族の方もどうぞ

馬場博史

トライアスロン・ランニングクラブ顧問、数学科

### ■箕面6時間リレーマラソン(誰でも)

06/25(土)箕面市第2総合運動場で。箕面緑化運動へのチャリティイベント。競争ではなく、10:00-16:00の間に交代で自由な距離を走ります。参加費無料。寄付あり。

### ■キッズトライアスロン浜寺公園(小中学生)

08/28(日)堺市の浜寺公園で。学年別Swim50-300m, Bike3-9km, Run0.5-3km。参加費3000-4000円。

### ■吹田市長杯トライアスロン大会(小学生以上)

09/04(日)千里北公園で。小学生Swim125m, Run1.4km, 中学生Swim500m, 固定Bike10km, Run2.8km, 高校生以上Swim1000m, 固定Bike20km, Run5.6km。参加費中学生以下無料、高校生以上1000円。

### ■吹田市長杯陸上競技大会(小学4年以上)

10/16(日)吹田市総合運動場で。トラック100mから5000mまでと各種投てき・跳躍種目。参加費無料。以上すべて、問合せ・申込みは馬場hbaba@senri.ed.jpまで。

# 保護者会だより

「保護者会だより」文責：  
保護者会Public Relations Committee

## 2005年度Board・各Committee よりのメッセージ

### Board(執行部)

保護者会会長 津高かおる

今年度、保護者会は、Board(執行部)とPublic Relations(広報)、Network(ネットワーク)、International Fair(インターナショナルフェア)、Hospitality(ホスピタリティー)の4Committee(委員会)の組織を中心に活動します。

Boardでは、保護者会の第一目的である「子供達のため」を念頭に、委員だけでなく多数の方々にご参加お手伝いいただき、話し合いを重ねながら楽しく進めていこうと話し合いました。

Boardの役目のひとつに、「橋渡し」があります。学校と保護者、OISとSIS、委員会間、学校外の団体との橋渡しもあります。創立15周年の今年度は、特に学校と話し合い講演会を開いたり、先生方やOIS保護者と私たちSIS保護者の小さな交流の機会を作っていく予定です。

### Public Relations Committee(広報委員会)

Public Relations Committee委員長  
吉積須美子

今年のPR(Public Relations Committeeの略称です)は、書くこと・話すこと・まとめることが大好きなメンバーが集まりました。今年は、保護者会に係わらないと判らない事、自分たちの知りたい事を、インターカルチャー・HPの中にどんどん取り入れたいと思います。特に、特集記事「学校(SIS)を取り巻く人々たち」では、いろいろな人々のご意見からSISの“今”を感じてみたいと思います。皆様のご協力よりしくお願いいたします。

### 活動内容

インターカルチャーの「保護者会だより」のページの制作・・・定例会報告・各委員会からのお知らせ・MIMIコーナーに加え、特集記事として「学校(SIS)を取り巻く人々たち」(4回シ

リーズ)を予定。

保護者会ホームページの運営・・・保護者会がより身近になるように、各委員会や学年の活動情報をお知らせする。また、皆様に意見の交換の場を提供する。希望者にメール配信サービスを開始。

### Network Committee(ネットワーク委員会)

Network Committee委員長 半田有美子

同じ地域の保護者や違う学年の保護者とのつながりを持ち、情報を交換し合い、交流を深め、それぞれの輪を広げて楽しく有意義な時間を過ごす。地域親睦会がそのような場になればと思います。その為に正確な地域名簿を地域リーダーの方々にお渡しして、地域親睦会を円滑に進めていただけるよう、保護者の皆様の交流を深めるお手伝いが出来ればと思っています。一年間どうぞよろしくお願いいたします。

### 活動内容

4月 新/編入生の地域チェックと割り振り・地域別名簿の作成

5月 地域リーダーの方々との懇談会

6月 地域別名簿の印刷、配布準備、地域リーダーへ配布

9月 編入生に伴う地域別名簿チェック・地域名簿の変更、追加を行い、印刷・配布(該当地域リーダーのみ)

10月 地域親睦会の開催状況を調べる  
2006年1月 編入生に伴う地域別名簿チェック・地域名簿の変更、追加を行い、印刷・配布(該当地域リーダーのみ)

2月 新旧地域リーダーの引継ぎ、懇談会 次年度地域名簿作成準備

### Hospitality Committee(ホスピタリティー委員会)

Hospitality Committee委員長 真砂智子

Hospitality Committeeは、学校の行事(スポーツバンケット、コンサート、招待試合、APACなど)のティーサービス、食事サービスのお手伝いをさせていただきます。今年のHospitality委員は総勢21名の大所帯ですが、初

めの仕事に期待と不安でいっぱいです。ぜひとも、皆さんのお力とお知恵とお時間をお貸し下さい。笑顔とHospitalityの心を忘れずに活動して行こうと思います。よろしくお願い致します。

### 活動内容

6月10日(金) 高等部スポーツ表彰式

6月14日(火) 高等部春季コンサート(メイプルホール)

10月14日(金)~15日(土) セイバー招待試合(男子バレーボール)

12月2日(金)~3日(土) オールスクールプロダクション

12月13日(火) 冬季コンサート

### 2006年

1月20日(金)~21日(土) セイバー招待試合(男子バスケットボール)

2月9日(木)~11日(土) APAC(男子バスケットボール)

### International Fair Committee(インターナショナルフェア委員会)

International Fair Committee

インターナショナルフェア委員会では、インターナショナルフェア(11月19日開催予定)に向けて企画準備を始めています。今年度は学園創立15周年ということもあり、学園全体でおおいに盛り上がりたいと考えています。もともとインターナショナルフェアは、SISとOISともにまだ小さな学校だった頃、各自のアイデアや得意の手作り品やリサイクル品を持ち寄り集めて行ったガレージセールが始まりと聞きます。15年の月日を経て、学園はこんなに発展し立派なフェアを毎年企画できるようにになりましたが、今一度、私たちにとってのフェアの意義を考えてみたいと話合っています。そこで、保護者の皆さん、生徒の皆さん、先生方など学園の関係者全員から、今年度のインターナショナルフェアのキャッチフレーズを募集します。現在、キャッチフレーズ募集に際しての企画を検討中です。皆さん、奮ってご参加下さい!!

## 2005年度保護者会総会のご報告

2005年5月20日(金)13:30~シアターにて開催されました。

会員数395名、出席者数107名、委任状数180、合計287名。

総会資料通り、学校長(平尾教頭先生代理)および2004年度会長挨拶のあと、2004年度活動報告、会計報告が行われ、その全てにおいて承認されました。引き続き2005年度委員役員紹介と新会長挨拶、2005年度の活動計画、予算案が発表され、全てにおいて承認されました。

## 保護者会活動報告

保護者会の活動を次のとおり報告いたします。

### ◎引き継ぎ会

4月14日(木)13:30~ カフェテリア  
各委員会委員長・副委員長・会計・書記、各学年委員代表の選出、新旧委員会の引継ぎをしました。

### ◎第1回定例会

4月21日(木)13:30~ カフェテリア  
学校から大迫校長先生、下村事務長のお話。委員自己紹介、2005年度保護者会の方針、各委員会活動計画案、予算案などについて話し合いと連絡がありました。

### ●今年度定例会予定

6月23日(木)、9月8日(木)、10月6日(木)、11月10日(木)、12月1日(木)、1月12日(木)、2月2日(木)、3月2日(木)

いずれも時間は13:30~15:30 場所は3階会議室の予定。(変更の場合あり)

\* 定例会は保護者の方のどなたでも出席していただけます。たくさんの方の参加をお待っています。

### 学年懇親会

7年生学年懇親会開催:5月9日(月)13:30~15:30 場所:カフェテリア

8年生学年懇親会開催:5月12日(木)13:30~15:30 場所:カフェテリア

## 保護者会だより「MIMIコーナー」のご案内

保護者の投稿欄です。詩、エッセイ、イラスト、提言、苦言、質問何でも結構です。皆さんからの声を大募集します。誌上匿名希望でも、投稿の際は記名して下さい。受付場所:玄関脇の赤いポスト或いはpr@sispa.jpへお願いします。担当:Public Relations Committee

## 保護者会ホームページ

ご覧いただいていますか?

<http://www.sispa.jp>

保護者会からのお便り、委員会の活動のようす、学年の動きなどをお伝えしています。

6月からはメール配信サービスも始めました。保護者会ホームページの最新情報を定期的にメールでお知らせします。ぜひご活用ください。



インターナショナルフェア委員より  
2005年11月19日(土) 予定

## 2005インターナショナルフェアに向けて!

今年度は学園創立15周年です。そこで学園全体でインターナショナルフェアを大いに盛り上げたいと思います。

**盛り上げ策その1: キャッチフレーズ、ロゴマーク、イラストを募集!**

大人も子供も、学園関係者なら誰でも応募できます。創立15周年を記念して「15」の数字が入っていれば後は自由です。キャッチフレーズ、ロゴマーク(フェア合言葉、フェアグッズ用として使います)、イラスト(パンフ表紙用)、どれか1点でも結構です。

応募方法...ロゴマーク、イラスト=玄関先の「フェア委員BOX」に投函、キャッチフレーズ=「フェア委員BOX」に投函、もしくはfair@sispa.jpに送信して下さい。「フェア委員BOX」の横に応募用紙を設置しておきます。(6月中旬予定)

応募の際は必ず記名をお忘れなく!

採用決定方法...公開投票にて採用キャッチフレーズ、ロゴマーク、イラストを決定します。採用者には豪華賞あり!! どんどん、奮ってご応募ください。締め切り等、募集要項の詳細は、応募用紙をご覧ください。  
**盛り上げ策その2: インターナショナルフェア委員会を定期開催!**

学園関係者ならどなたでもウェルカムです!! こんなオモロイ案がやりたい、あんな楽しい企画がいいと提案ある人、ご意見ご質問ある人、あなたも私も、皆で手作りのフェア企画に参加させません。

6/7(火) 10:00~12:00 (3F会議室)

6/22(水) 10:00~12:00 ( " )

7/05(火) 10:00~12:00 ( " )

8月以降は未定ですが、定期的開催する予定です。

お問合せ先: フェア委員宛のemailにてお願いします。fair@sispa.jp

## 6～8月行事予定

月	日	曜	
06	14	火	高等部春季コンサート(6:30メイプルホール)
	15	水	第2回学校説明会
	17	金	OIS高等部卒業式(19:00シアター)
	23	木	中等部春季コンサート(4:00シアター)
	30	木	春学期終了
07	01～07		サマーキャンプ期間
	08～30		オーストラリアホームステイ
	25～8/5		サマープログラム "Just For Kids "
08	08～19		サマープログラム "Just For Kids "
	31	水	秋学期開始

### 学校説明会のお知らせ

6月15日(水)第2回学校説明会にて、本校英語教育についての紹介があります。お知り合いの方で、本校に興味をお持ちの方がいらっしゃいましたらお知らせください。

### 訂正とお詫び

製本版99号「学年だより」中等部2年生(8年生)のタイトルが『「ミッション1:きれいにしようぜ北公園」の報告』になっていましたが、正しくは『Five Respects Poster Competition』でした。訂正してお詫びいたします。(Web版は訂正済です)

### 編集後記

無事に100号の編集を終えることができました。記念記事を寄稿して下さった保護者、在校生、卒業生の皆さん、ありがとうございました。「二つの学校がここにある」ことは、この学園の最も大きな特色であるといえるのではないのでしょうか。残念ながら今回、このテーマでの教職員からの投稿はありませんでしたが、もしあれば、一部にその苦勞話があったかも知れません。時には「二つの学校」が少し負担に感じることもありますが、それ以上に面白いこと、楽しいことが数多くあります。この学園だからこそ経験できる素晴らしいことが山ほどあります。この学園で仕事をさせていただけるということを幸運に思い、さらにこの学園の良さを、広報誌やウェブサイトを通じて広く伝えていきたいと思っています。これからも、ご協力をよろしくお願いいたします。(馬場博史)

夏が近づくと、虫好きの息子は、草むらを見つけるとしゃがみ込んで、虫を探しています。普段は、ただ通り過ぎるだけの道も、視点を下げると色々な生き物がいるのに気が付きます。アリやダンゴ虫が行き来するのをじっと見ていると、子供の頃の時間ってこんなんだったな、それに比べると今はなんと時間に追われる生活を送っていることが。たまには、こんな時間も、いいなと思いますし、子供の時間をもっと大切にしていってあげたいなと思います。(志垣満理)

インターカルチャへの記事・ご感想等は、e-mailで [hbaba@senri.ed.jp](mailto:hbaba@senri.ed.jp) までお送り下さい。インターカルチャはバックナンバーも含めて本学園ホームページ [www.senri.ed.jp/interculture](http://www.senri.ed.jp/interculture) でもご覧いただけます。また広報センター担当の学園ホームページにつきましてのご意見・ご感想などもお待ちしております。

編集：SIS広報センター 保護者会だより記事：保護者会広報委員 カット：イラストレーションクラブ生徒

Senri International School Foundation (SISF)

Senri International School (SIS)

Osaka International School (OIS)

4-4-16, Onohara-Nishi, Minoh-shi, Osaka 562-0032, JAPAN

TEL 072-727-5050 FAX 072-727-5055

学校法人千里国際学園(SISF)

千里国際学園中等部・高等部(SIS)

大阪インターナショナルスクール(OIS)

〒562-0032 大阪府箕面市小野原西4丁目4番16号

電話072-727-5050 FAX 072-727-5055

### 年間発行予定と主な内容 ( )は発行時期

春学期 5月号(上旬)卒業式、入学式、大学等合格状況

6月号(中旬)学園祭、教育実習

秋学期 10月号(上旬)夏の宿泊行事、夏の諸活動報告

11月号(中旬)運動会、玄関コンサート

冬学期 2月号(上旬)オールスクール「ワクショ」

3月号(中旬)入試結果、卒業生へ贈る言葉

他に留学報告、スポーツ結果、各種表彰、授業紹介、生徒会・クラブ活動等

千里国際学園は、帰国生徒を中心に一般日本人生徒や日本の教育を希望する外国人生徒も受け入れて日本の普通教育を行う千里国際学園中等部・高等部 Senri International School (SIS) と、4歳から18歳までの主に外国人児童生徒を対象とする大阪インターナショナルスクール Osaka International School (OIS) とを、同一敷地・校舎内に併設しています。

両校は一部の授業や学校行事・クラブ活動・生徒会活動等を合同で行っています。チームスポーツはこの2校で1チームを編成しており、APAC(Asia Pacific Activities Conference)の公式試合や、近隣のインターナショナルスクール、日本の中学・高校との交流試合等に参加しています。このため、校内ではインターナショナルスクールの学校系統に合わせて、6年生～8年生(日本の小学6年生～中学3年生春学期)をミドルスクール(MS)、9年生～12年生(日本の中学3年生秋学期～高校3年生)をハイスクール(HS)と呼んでいます。